

[目次]

選挙実施のお知らせ.....	1
日本生態学会各賞候補者募集.....	2
第65回日本生態学会大会（札幌）案内.....	6
第64回日本生態学会大会（東京）開催報告.....	11
記事	
I. 一般社団法人日本生態学会平成29年度定時総会、代議員会、 各種委員会において報告・承認・決議された事項.....	13
A. 報告事項.....	13
B. 審議事項.....	23
II. 第64回日本生態学会大会記録.....	28
III. 業務執行理事の選任について.....	33
IV. 規則の改訂について.....	33
V. 書評依頼図書.....	34
VI. 寄贈図書.....	34
お知らせ	
1. 公募.....	34
書評.....	35
公募カレンダー.....	39
日本生態学会役員・代議員・委員一覧.....	40
京都大学生態学研究センターニュース.....	43

2017年10月選挙実施のお知らせ

2017年10月に定款第6条、29条ならびに「一般社団法人日本生態学会役員・代議員選任規則」に従って、日本生態学会の次々期会長（理事兼代表理事）候補者と次期代議員の選挙を行います。投票方法は、(i) ウェブサイトからの電子投票、あるいは(ii) 郵送投票のどちらかを選択できますが、(ii) 郵送投票を希望される方は【8月31日（木）必着】で学会事務局まで郵送・E-mail または Faxにてご連絡ください。

日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

E-mail: office@mail.esj.ne.jp Fax: 075-384-0250

※連絡の際には【必ず会員番号とお名前】をお知らせくださいますようお願いいたします。

〔重要〕 郵送投票を希望した方は電子投票を行うことができません。

開票作業省力化のため、ウェブサイトからの電子投票にご協力をお願いいたします。

日本生態学会各賞候補者募集

第16回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本法人会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第22回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第11回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、「日本生態学会大島基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第6回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として3名の受賞者を選考し、「日本生態学会鈴木基金」から各々5万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<http://www.esj.ne.jp/>) よりダウンロード
3. 送付先：
（郵送） 〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
（〇〇は応募する賞名を入れて下さい）
（電子メール） office@mail.esj.ne.jp
4. 締め切り日：2017年8月17日（木）必着

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞細則

第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。

第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）細則

第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。

第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候

- 補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第 5 条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第 6 条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第 7 条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第 8 条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および鈴木基金より賞金5万円を贈呈する。
- 第 9 条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第 10 条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

第 65 回日本生態学会大会（札幌）案内

第 65 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ65）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。詳細は次号のニュースレター又は下記の大会公式ホームページで随時ご確認下さい。

日程・会場

2018 年 3 月 14 日（水）～ 18 日（日）
札幌コンベンションセンター（<http://www.sora-scc.jp/index.html>）

第 65 回日本生態学会大会（ESJ65）実行委員会

大会会長：日浦勉（北海道大学）、大会実行委員長：工藤岳（北海道大学）
大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/65/>
本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします。

提案・申込の受付開始・締切

【受付開始】

新規入会・再入会申込	随時
シンポジウム企画提案	2017 年 6 月 30 日（金）から
英語口頭発表賞エントリー	2017 年 6 月 30 日（金）から
他の申込み	締切の 1 ヶ月程度前から

【締切】

講演・企画者の新規入会・再入会申込	2017 年 10 月下旬（予定）
シンポジウムの企画提案	2017 年 8 月 31 日（木）17:00
英語口頭発表賞エントリー	2017 年 10 月 1 日（日）23:59
企画集会申し込み	2017 年 10 月 31 日（火）17:00
自由集会申し込み	2017 年 10 月 31 日（火）17:00
一般講演申し込み	2017 年 10 月 31 日（火）17:00
講演要旨登録	大会の約 1 ヶ月前（予定）
一般講演口頭発表用ファイルの登録	大会の数日前（予定）

※スケジュールに変更の可能性がありますので、適宜、大会公式ホームページで確認ください。

※すべての締切に関して、締切後の追加や修正等の依頼には対応できません。

大会参加資格一覧

会員種別ごとの参加資格は以下の通りです。企画・講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧ください。

講演種別 \ 会員種別	正会員	非会員
一般講演（口頭・ポスター）	○	
シンポジウム・企画集会・自由集会の企画	○	
シンポジウム講演	○	○
シンポジウム・企画集会・自由集会のコメンテータ *1	○	○
企画集会講演	○	○ *2
自由集会講演	○	○

*1 要旨を登録しないコメンテータを指します。要旨登録を行うコメンテータの資格は「講演」に準じます。

*2 大会企画委員会・大会実行委員会が特別に認めた場合に限り、集会あたり 1 件まで可能です。

- ・非会員が講演・企画を希望される場合は、2017年10月下旬までに学会員となって下さい（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様です）。
- ・高校生ポスター発表会に参加される高校生（中学生含む）については、高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学」の案内をご覧ください。
- ・非学会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆として参加できます。

大会参加費・懇親会費

- ・大会参加費・懇親会費は、学会費と別に納入していただきます。詳しくは、次号のニュースレターでお知らせします。
- ・学部生の参加を促進するために、大会参加費の大幅な割引もしくは無料化を検討中です。
- ・自由集会のみに聴衆として参加する場合には、大会参加費は不要です。

公開講演会

日本生態学会第21回公開講演会

講演会タイトル：「極限に棲む生物の生き様—身近な生態系の成り立ちを知るヒント（仮題）」

日時：2018年3月18日（日）

会場：札幌コンベンションセンター

内容の詳細については、次号のニュースレターでお知らせします。

シンポジウムの企画案の公募

ESJ65では、大会シンポジウムの企画案を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。シンポジウムの開催時間は約3時間の予定です。大会シンポジウムの企画を希望される方は、2017年8月31日（木）17:00までに以下の内容をメールで esj_sympo@mail.esj.ne.jp までお送りください。

- ・提案者名 連絡窓口となる1名のみ。共同企画者は採択後に登録します。
- ・提案者の連絡先メールアドレス このアドレスに採択結果を通知します。
- ・シンポジウムの仮題 プログラム原稿を作成する時点で変更可能です。
- ・提案の内容 シーズ段階のものでも構いませんが、講演者・講演内容が決まっている場合はご記入下さい。

【企画内容について】

- ・大会参加者は、毎年多様なテーマに関するシンポジウムが開催されるとともに、それまでにはなかった新鮮なテーマのシンポジウムが開催されることを期待しています。大会企画委員会は、シンポジウム企画経験の少ない方からの企画提案を歓迎します。
- ・シーズ段階のものでも結構ですが、主な講演者がおおよそ決まっている企画案を歓迎します。
- ・他分野との交流を深めるため、生態学会会員以外の方に招待講演をしていただくことも可能です。招待講演者の参加費は無料となります。
- ・ESJ65では、シンポジウムで講演する海外研究者のうち1名以上を *Ecological Research* 誌による招聘講演者として採用予定です。招聘講演者は旅費の支給を受ける事ができ、大会参加費も無料となります。大会後にシンポジウム内容に関連したレビュー論文もしくは特集論文などを *Ecological Research* 誌に投稿していただくことが原則となります。
- ・若手研究者からも意欲的な提案を期待しています。

【英語使用について】

- ・日本生態学会では、留学生や海外からの研究者による大会参加が増えています。今後もさらに大会参加者どうしの研究交流が進むことを目指して、ESJ65では、シンポジウム・集会等における英語の使用（日本語との併用を含む）を奨励します。
- ・英語で開催されるシンポジウムは優先的に条件の良い部屋に割り付けます。
- ・日本語で開催されるシンポジウム・集会では、可能な範囲で、スライドでの英語の併記や簡単な英語版ハンドアウトの用意などの工夫をお願いします（ハンドアウトや二か国語スライド等は、英語開催のシンポジウム・集会において非英語話者の参加を促すのにも有効です）。

【企画案の採用について】

- ・大会企画委員会は応募された企画案を検討し、大会全体のバランスに配慮して、採択する提案を決定します。
- ・採択された企画の提案者には企画者（オーガナイザー）としての参加を要請します。

- ・大会企画委員会はコーディネータを出して各シンポジウムの企画運営を支援し、シンポジウム間の調整を行います。
- ・企画案が多数寄せられ会場のキャパシティを超えてしまう場合や、内容的にシンポジウムとしての開催が難しいと判断される企画がある場合は、企画集会や自由集会として再提案していただくことがあります。

【応募の制限について】

- ・企画者は日本生態学会正会員に限ります。非会員は企画者（企画の責任者および連名の共同企画者を含む）になれません。
- ・異なるシンポジウム間で重複して企画者または講演者となることはできません（「講演者」は「講演の主たる説明者」を意味します。以下同様）。企画段階で重複が確認された場合には、コーディネータを通じて調整をお願いします。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は企画集会の企画者・講演者になることはできません。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。

企画集会と自由集会

ESJ65では企画集会と自由集会を募集します。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。企画集会・自由集会ともに、企画者は日本生態学会正会員である必要があります。企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断されるものについては、その限りではありません。

【企画集会】

- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の企画者・講演者はシンポジウム及び他の企画集会の企画者・講演者となることはできません。
- ・企画集会の企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・企画集会での講演者（主たる説明者）は原則、日本生態学会正会員に限定されます。非会員による講演は、特に事情があり企画提案時にその理由を記載した場合のみ、企画あたり1件まで認められます。ただし、同一の非会員が2年連続で、企画集会で講演することは認められません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。
- ・限られた会場を平等に分け合って使用するため、企画集会はできるだけ3人以上の講演者で構成して下さい。

【自由集会】

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの重複発表は認められますが、日程の調整は行いません。
- ・大会の正式行事ではありませんので、会場は集会主催者が責任をもって管理して下さい。

【応募要領】

企画集会および自由集会の応募締め切りは、2017年10月31日（火）17:00です。具体的な申し込み方法は次号のニューズレター、および大会ホームページでお知らせします。

【企画集会と自由集会の採否について】

- ・企画集会は、自由集会に優先して採択されます。提案された集会（企画集会・自由集会）の数が会場の収容可能数を上回る場合には、全部の自由集会の開催を取りやめても会場が足りない場合にのみ抽選を行い、企画集会の採否を決定します。
- ・自由集会の提案数が会場の収容可能数を上回る場合には、同一会員が重複して複数の集会（自由集会・企画集会）の企画者となっている自由集会を不採択とします。次に、大会シンポジウム企画者による自由集会を不採択とします。それでも数が多い場合には、抽選で自由集会の採否を決定します。

- ・限られた場所と時間を分け合って使うため、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は自由集会の企画をできるだけご遠慮下さい。2つ以上の自由集会の企画・講演もご遠慮下さい。
- ・開催の可否については、締め切りの約2週間後にメールでご連絡します。

大会シンポジウム・企画集会・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	企画集会	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。大会の正式行事。	シンポジウムに次いで核となる集会。大会の正式行事。	様々な話題を自由に議論できる場。大会の正式行事ではありません。
開催時間	約3時間	約2時間	約2時間
開催の優先度	最優先されます。	シンポジウムの次に優先されます（自由集会の開催を全て取りやめても会場が足りない場合のみ、抽選で採否を決定します）。	優先されません（会場が足りない場合は抽選で採否を決定します）。
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられます）。	シンポジウムの次に優先されます。	優先されません。
企画運営段階での企画委員会の関与	関与します。企画委員がコーディネータとして企画運営を支援します。内容の重複がみられる場合、複数のシンポジウムの合体を勧めることがあります。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。
企画者の資格	正会員	正会員	正会員
非会員による講演	奨励します（審査の上、招待講演者として参加費を免除します）。	集会あたり1件まで可（同一非会員の2年連続は不可）。大会参加費を支払う必要があります。	認められます（自由集会での非会員講演者が大会の他行事に参加する場合には、大会参加費を支払う必要があります）。
海外からの招待講演者への学会からの旅費支給	大会全体で1名以上認められます。	なし	なし
一般講演との重複発表	不可	不可	可
他集会との重複発表	自由集会・フォーラムのみ可能。	自由集会・フォーラムのみ可能。	全て可能。
提案締切日	8/31（木）	10/31（火）	10/31（火）
概要登録/集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	10/31（火）	10/31（火）	10/31（火）
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要のみ掲載されます。

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複発表制限の対象となりません。フォーラムの申し込みは各委員会代表者が行います。

一般講演

- ・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。
- ・発表内容に応じて会場・時間の割り振りを行いますので、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。ESJ65での発表募集時の分野区分については現在検討中です。なお、応募状況に応じて募集時の区分は統廃合されますので、大会開催時の分野区分は募集時のそれと異なる可能性があります。予めご了承下さい。
- ・口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。また、英語による発表を集めた「英語口頭発表枠」を選ぶこともできます（発表内容に応じた分野分けも行います）。この場合は、下記の「英語口頭発表賞」にエントリーした発表と共にセッションを構成します。

注意：

- ・一般講演の演者は、日本生態学会の会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・1人で2つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承下さい。

高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学講座」

- ・日本生態学会は、生態学の社会への普及のため、アウトリーチ活動の一環として、高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学講座」を実施しています。第64回東京大会では、学年末の多忙な時期にもかかわらず、3月18日（土）に52件の発表があり、最優秀賞、優秀賞などたくさんのポスターを表彰しました。引き続き、第65回札幌大会でも高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学講座」を開催します。
- ・高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学諸分野の専門家や学生、他の参加校との交流を通して、生態学全般への関心をさらに高めていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。参加費は無料です。
- ・第65回札幌大会においても、高校生ポスター発表会に参加した高校生と若手研究者との交流会「みんなのジュニア生態学講座」を企画します。2～3名の若手研究者に話題提供をお願いし、どのような中学・高校時代だったか、研究者を目指したきっかけは？等のエピソードも含めて、ご自身の研究を語ってもらいます。質問時間を十分に設けますので、ご期待ください。
- ・開催日時や参加申込み・要旨登録・授与される賞等の詳細については、次号のニュースレター／日本生態学会公式HP／全国規模のML等で配信しますので、ぜひお問い合わせの高校教員や高校生に周知していただきますよう、よろしくお祈りします。

英語口頭発表賞

ESJ65では、第5回英語口頭発表賞を実施します。賞の目的は、大会における英語による研究発表を振興し、留学生や国外からの参加者との議論の場を、より多く作ることです。特に若手研究者のコミュニケーション能力と国際的情報発信力を高める機会を増やすことを重視しています。参加される方は、英語口頭発表賞ホームページを見て10月1日（日）までにメールで申し込んで下さい。また、賞に該当しない「非若手研究者」の方の一般講演も別途募集しますので、ふるってご参加ください。

<https://sites.google.com/site/esj65engpresenaward/>

English Presentation Awards, EPA

Hey guys, shall we have international exchange? Yo, check it out, yo!!

ESJ65 organizes English Presentation Awards (EPA) for early career ESJ members who have received Ph.D within the last 5 years. The aim of EPA is to promote English presentations in ESJ annual meetings and give all participants more opportunities for scientific discussion with international students and visiting foreign researchers. At the same time, early career members are expected to improve English communication skills and international information dissemination abilities. If you are interested in EPA, please check the website below and send applications via email by Oct. 1st (Sun). Of course, "non-early career" members are also welcome to make general presentations and join our English sessions.

<https://sites.google.com/site/esj65engpresenawarden/home>

ポスター賞

ESJ65では、若手の研究を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター発表では、英語での説明を併記するなど、日本語を理解しない参加者への配慮を推奨します。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニュースレターに掲載します。

エコカップ2018

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ2018が行われます（3月19日を予定）。主催はエコカップ2018実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします（<http://stellaria.lowtem.hokudai.ac.jp/ecocup2018/>）。

第64回日本生態学会大会（東京）開催報告

川北篤（東京大会大会企画委員長）

日本生態学会第64回大会は、2017年3月14日（火）から18日（土）までの5日間、早稲田大学早稲田キャンパスで開催されました。生態学会の大会は、参加者数が2,000名を超えることがここ数年で定着しており、東京大会では75件もの集会（シンポジウム・企画集会・フォーラム・自由集会）と1,218件もの一般講演（口頭・ポスター）がありました。さまざまな研究者の方達と会い、幅広い分野の発表を聞くことができるのは、生態学会の最大の魅力だと思います。一方で、会場や予算の管理、懇親会、公開講演会の運営など、これだけの規模の大会を開催するにあたり実行委員会の皆様には大変なご苦労があったと思います。小泉博大会会長、関川清広大会実行委員長をはじめとする実行委員会の皆様のご努力にこの場を借りてお礼申し上げます。

生態学会はその規模もさることながら、多様な企画が開催されることも特徴の一つだと思います。2013年静岡大会から始まった高校生ポスター発表や、2014年鹿児島大会から始まった英語口頭発表賞はすっかり定着し、東京大会ではそれぞれ52件、59件の応募がありました。高校生ポスター発表と合わせて開かれた「みんなのジュニア生態学講座：高校生と若手研究者の交流会」は第3回をむかえ、次世代の育成に向けた取組みとして定着しています。さらに今大会では、キャリア支援専門委員会による試みとして、小学生を対象としたこども生態学講座が開催されました。第20回を数えた公開講演会では、「街のなかの多様な生き物と街を支える生態系」というテーマで、生態学の成果が社会に発信されました。さらに、学会の各種委員会や理事会によるフォーラムが9件開催され、生態学に関連するさまざまな学術的・社会的問題が議論されたり、情報提供がなされたりしました。このようにして見ると、生態学会の魅力や、大会が果たしている役割が年々多様化していることを実感できます。

生態学会の大会は、担当地区会で組織される大会実行委員会に加え、学会の常設の委員会である大会企画委員会の2つの委員会が両輪となって運営しています。大会企画委員会は、講演や各種集会の受付、賞の運営、プログラムの編集など、現地にいなくてもできる、毎回の大会で共通して行われる運操作業を担当します。このような運営体制は、大会参加者の増大による実行委員会への負担を減らすため、2005年の大阪大会から採用されたもので、今回の東京大会で13年目となります。大会企画委員会は発足当初は10名ほどで構成されていたようですが、大会の複雑化にともなって委員の数も増え続け、今大会は68名で構成されました。大会の魅力を持しながら、いかに会員による作業負担を軽減していくかがここ数年の重要な課題となっています。

現在、生態学会では大会改革が進行中です。これについては、吉田丈人さんを中心としたあり方検討部会によって準備が進められており、東京大会で開催されたフォーラム「学会大会の改革：自由集会は必要か？」でも活発な議論がありました。本格的な改革は2019年近畿大会からになる見込みですが、大会改革に先立ち、これまで会員のボランティアによって運営されていた大会参加・講演登録システムを今年度から国際文献社に委託しました。新システム1年目ということで思わぬトラブルが続き、参加者の皆様のご希望に添えなかった点も多かったと思いますが、これまで会員個人のボランティアに依存していた体制から脱却できたことは、効率的な運営に向けた大きな一歩だったと思います。大会改革に合わせて、大会企画委員会の作業全体についても見直し、さらなる運営の効率化を進める必要があります。大会改革については、会員の皆様の意見を集約するアンケートが今後行われる予定ですので、引き続きご協力をお願いいたします。

これらの議論と平行して、次回札幌で開催される第65回大会にむけ、日浦勉大会会長、工藤岳大会実行委員長、山本智子大会企画委員長のもと、すでに準備が進められています。札幌大会は、現在の運営体制を維持した最後の大会になります。規模の大きな大会は運営の側からすると大変ですが、これだけ多くの研究者が一度に集まり、さまざまな分野の新しい研究の話を開けることこそが生態学会の何よりの魅力だと思います。札幌大会にも多くの参加者が集まり、東京大会にも増して盛会となることを祈っております。

謝辞

大会運営に関わった大会実行委員会・企画委員会の皆様に加え、多くの方々のご協力のもと、東京大会が開催されました。ここに記して、厚くお礼申し上げます。

共立出版株式会社とシュプリンガー・ジャパン株式会社には、それぞれ高校生ポスター賞と英語口頭発表賞の副賞を提供していただきました。

また、以下の方々に一般講演のポスター賞、英語口頭発表賞、高校生ポスター賞の審査を担当していただきました。

皆様、どうもありがとうございました。

ポスター賞（順不同、敬称略）：

土畑重人、浅見崇比呂、安部淳、橋本佳延、石庭寛子、畑啓生、竹中明夫、石濱史子、黒川紘子、川上和人、鈴木亮、長太伸章、門脇浩明、佐藤安弘、辻かおる、安東義乃、小林知里、坂田ゆず、塩尻かおり、石崎智美、深野祐也、滝久智、西嶋翔太、吉岡明良、土田浩治、徳田誠、

大槻久、中桐斉之、入江貴博、石井潤、小関右介、油田照秋、小林聡、坂本佳子、宮脇成生、井田秀行、澤田佳宏、吉村真由美、境優、高畠千尋、山下聡、山口幸、永田尚志、細将貴、田中幸一、京極大助、大庭伸也、齋藤星耕、西本篤史、深谷肇一、川津一隆、澤田晶子、山中裕樹、飯田佳子、木村（加藤）恵、北岡哲、佐藤永、小林真、矢野翠、大橋瑞江、荒木田葉月、藤巻玲路、小野賢二、檀浦正子、仁科一哉、石井弓美子、阿部真人、高橋晃周、城野哲平、田村典子、杉田典正、高須賀圭三、斎藤昌幸、山中聡、藤田素子、佐藤重穂、谷内茂雄、大場真、岩泉正和、山尾僚、三宅崇、宮崎祐子、立木佑弥、饗庭正寛、横溝裕行、江川知花、中下留美子、高倉耕一、東出大志、岸茂樹、北野忠、南野亮子、宮澤真一、小山里奈、吉藤奈津子、野口（舟山）幸子、井上智美、清野達之、宮沢良行、鈴木祥弘、黒田慶子、木塚俊和、このほか匿名の方 19 名

英語口頭発表賞（順不同、敬称略）：

土居秀幸、松岡俊将、齊藤隆、佐々木雄大、瀧本岳、酒井章子、高橋佑磨、越川滋行、日室千尋、池田紘士、山浦悠一、韓慶民、杉浦真治、北島薫、隅田明洋、彦坂幸毅、韓慶民、本間淳

高校生ポスター賞（順不同、敬称略）：

栗和田隆、土居秀幸、西脇亜也、深沢遊、小口理一、嶋田正和、中井咲織、宮田理恵、安立美奈子、山村靖夫、水澤玲子、広瀬祐司、岡本朋子、三宅崇、平山大輔、亀田佳代子、畑田彩、石田清、道前洋史、浦部美佐子、鮫島弘光、赤坂宗光、北條賢、鈴木まほろ、高橋一秋、このほか匿名の方 1 名

記 事

I. 一般社団法人日本生態学会平成 29 年度定時総会(第 64 回大会会員総会、2017 年 3 月 17 日、代議員 18 名・委任状提出代議員 2 名・会員約 70 名参加) および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 2016 年度会員数・学会誌発行状況

日本生態学会誌 66 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	2630	2620	2640
配本部数	2604	2602	2606
残部数	26	18	34

保全生態学研究 21 巻

	1 号	2 号
発行部数	1420	1430
配本部数	1361	1378
残部数	59	52

Ecological Research Vol.31

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	2260	2260	2260	2310	2310	2310
配本部数	2258	2259	2253	2263	2248	2273
残部数	2	1	7	47	62	37

会員数

	2015 年 12 月末現在			2016 年 12 月末現在		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	243	124	367	243	124	367
東北	169	78	247	164	94	258
関東	985	314	1299	1001	330	1331
中部	393	129	522	389	140	529
近畿	453	269	722	477	280	757
中四国	204	71	275	196	71	267
九州	231	76	307	225	69	294
外国	29	26	55	34	22	56
小計	2707	1087	3794	2729	1130	3859
賛助			96			90
名誉			3			3
小計			99			93
合計			3893			3952

会費納入率 (各年 12 月末現在)

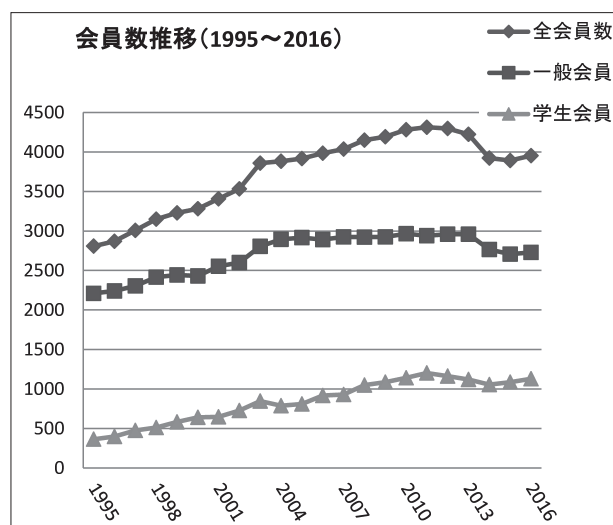
	2015 年		2016 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	91.8	75.0	90.5	73.4
東北	91.1	70.5	93.9	73.4
関東	92.4	71.3	93.9	74.2
中部	92.1	70.5	93.1	82.9
近畿	93.2	81.0	92.2	80.4
中四国	90.7	67.6	90.8	66.2
九州	90.0	86.8	91.6	75.4
全体	92.1	74.9	92.6	76.4

雑誌不要者数変遷 (各年 12 月末)

	一般					学生				
	会員数	生態誌不要	ER 不要	会員数	生態誌不要	ER 不要	会員数	生態誌不要	ER 不要	
2008	2725	107	4%	146	5%	1021	80	8%	85	8%
2009	2740	171	6%	215	8%	1061	148	14%	157	15%
2010	2582	321	12%	419	16%	952	221	23%	239	25%
2011	2738	371	14%	478	17%	1175	339	29%	364	31%
2012	2760	478	17%	606	22%	1135	407	36%	431	38%
2013	2757	531	19%	679	25%	1097	477	43%	501	46%
2014	2765	614	22%	789	29%	1054	495	47%	528	50%
2015	2707	623	23%	811	30%	1069	522	49%	563	53%
2016	2729	726	27%	952	35%	1130	716	63%	633	56%
2017	2614	750	29%	982	38%	1234	820	66%	846	69%

1/16
現在

※ 2013 年までは AB 会員数



b. 庶務報告 (2016 年 4 月～2017 年 3 月)

- 日本学術振興会より平成 28 年度科研費(公開講演会)について内定通知があった。交付額は 1,400,000 円(4 月 1 日)
- 日本学術振興会より平成 28 年度科研費(国際情報発信強化 A)の内定通知があった(H25 年度より 5 年間交付、H28 年度 16,600,000 円)(4 月 1 日)
- 大会業務について国際文献社と打ち合わせをした(4 月 6 日)
- 学会員対象に「大会の運営と財政の改革に関するアンケート」を実施した(4 月 11 日～5 月 14 日)
- 日本生態学会へ平成 27 年度科研費(公開講演会)実績報告書を送付した(4 月 15 日)
- JST(科学技術振興機構)の J-stage 利用説明会に参加した(4 月 18 日生態誌・6 月 6 日保全誌)
- 法務局に平成 28 年定時総会にて就任した理事・監事交代を申請し登記された(4 月 19 日)
- 日本生態学会へ平成 27 年度科研費(国際情報発信強化 A)実績報告書を送付した(5 月 6 日)
- 国際文献社のオンライン会員管理システム(マイページ)がリリースされた(7 月 7 日)
- 第 64 回東京大会懇親会費(一般 10,000 円・学生 4,000 円)について理事会メール審議を行い全会一致

で承認された（8月19日）

11. 東京都水道局より魚類の生態に関する問い合わせがあり、占部副会長が対応した（8月22日）
 12. キャリア支援専門委員会からのESJ64企業紹介ブースの設置とそれにかかる委託費用の拠出について理事会メール審議を行い全会一致で承認された（11月7日）
 13. 学術振興会に平成29年度科研費（研究成果公開発表）計画調書など応募書類一式を送付した。（11月11日）
 14. 第19回生態学琵琶湖賞の応募を締切った（11月18日）
 15. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・奨励賞（鈴木賞）候補者について理事会メール審議にて全会一致で承認された（12月1日）
- 他、各種集会への後援・協賛名義使用承認8件、論文図表等の転載許可7件

c. 会計報告（2016年4月～2016年3月）

1. シュプリンガーへ2016年1・2号分の出版費として3,215,520円を支払った（4月14日）
2. 科研費（国際情報発信力強化）前期分として10,000,000円の入金があった（7月8日）
3. 科研費（研究成果公開）として1,400,000円の入金があった（7月8日）
4. 国際文献社へ会員管理委託、初期費用1,353,602円と4-6月経常費用2,966,430円を支払った（8月4日）
5. 土倉事務所へ日本生態学会誌66-1印刷費として2,414,340円を支払った（8月23日）
6. 土倉事務所へニュースレターNo.39印刷費として413,100円を支払った（8月23日）
7. 東京化学同人より「生態学入門2版」印税として404,320円が振り込まれた（8月25日）
8. 土倉事務所へ保全生態学研究21-1印刷費として935,496円を支払った（9月26日）
9. 土倉事務所へ日本生態学会誌66-2印刷費として2,473,070円を支払った（9月26日）
10. 科研費（国際情報発信力強化）後期分として6,600,000円の入金があった（10月28日）
11. 土倉事務所へニュースレターNo.37印刷費として267,300円を支払った（10月23日）
12. シュプリンガー・ジャパンへEcological Research Vol.31 No.3-6出版委託費として6,449,940円を支払った（12月13日）
13. INTECOL会費（会員数*1\$）446754円を支払った（12月14日）
14. 土倉事務所へ日本生態学会誌66-3印刷費として1,839,024円を支払った（1月12日）
15. 土倉事務所へ保全生態学研究21-2印刷費として1,050,192円を支払った（1月12日）
16. 国際文献社へ会員管理委託、初期費用42,613円とH28年10-12月経常費用793,987円を支払った（1月30日）
17. テコラス（株）へサーバ年間利用料として409,320円を支払った（1月25日）

18. 2016年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された（2月10日）

2. 大会企画委員会

東京大会委員長 川北篤（京都大学）

札幌大会委員長 山本智子（鹿児島大学）

報告事項

- a. 今大会より大会登録システムを国際文献社に全面委託したことにより、会員ボランティアへの依存を解消することができ、大きな負担軽減ができた。
- b. ポスター賞の表彰式を廃止し、受賞者へは後日賞状をPDFで送付することにした。ポスター賞受賞者は学会賞授賞式の最後に紹介する。
- c. 東京大会申し込みデータ（例年から大きな変化なし）
 1. 集会（11/1 締切）：計75件
 - ・シンポジウム14件（うちERシンポジウム2件）
 - ・企画集会17件
 - ・自由集会35件
 - ・フォーラム9件
 2. 一般講演（11/10 締切）：計1,218件
 - ・ポスター発表955件（ポスター賞応募476件）
 - ・口頭発表264件（英語口頭発表含む）
 - ・英語口頭発表59件
 3. 高校生ポスター発表：52件

（参考）過去大会データ

回	開催地	ポスター	口頭	一般講演合計	シンポ	フォーラム	企画集会	自由集会	集合計
59	大津*	1130	277	1467	26	5	20	32	83
60	静岡	894	211	1105	13	6	17	36	72
61	広島	944	214	1158	17	7	25	30	79
62	鹿児島	866	166	1032	12	11	19	29	71
63	仙台	949	243	1192	4	13	24	37	78
64	東京	955	264	1219	14	9	17	35	75

*EAFES 合同大会

（文責：川北篤）

3. Ecological Research 刊行協議会

日時：2017年3月14日（火）14:00 - 16:00

場所：早稲田大学 Room B 3号館302

出席者：久米篤（Editor-in-Chief）、仲岡雅裕（Deputy EiC）、福井学、三木健、中村誠宏（後半参加）、小野田雄介、大塚俊之、陀安一郎、富松裕、露崎史朗、井鷲裕司、山浦悠一（以上 Associate EiC）江成広斗、福井大、菊沢喜八郎、北村俊平、工藤岳、兵藤不二夫、陶山佳久、山尾僚、中路達郎、牧野渡（以上 Editor）、岡田慶一（Copy Editor）、奥崎穰、中村祥子（Managing Editor）、水野隆文氏（三重大学）、Prof. Guillaume Echevarria（Universite de lorraine / INRA, France）ほか、Dr. Jacco Flipsen（Vice President Life Sciences, Springer Dordrecht）、山口英美子氏、松本有子氏（以上 シュプリンガー・

ジャパン)、青島裕子 (Editorial Coordinator)

a. 事務局報告

久米編集長より資料に沿って編集・出版状況が報告された。海外からの投稿数は増加しているが、採択率は下がっているため、2016年の出版論文数・ページ数は減少した。現在は国内からの投稿が増加傾向にあり、特集も多数進行中であるため、今後の出版論文数は大幅に増加する予定である。編集活動は概ね順調に運営されており、審査期間はさらに短縮しており、編集の効率化がはかられていることが示された。編集委員の交代について説明があり、今年で任期終了予定のAEICには後任を推薦していただくよう依頼があり、来年からは仲岡編集長となることも確認された。次に、Springer社の松本氏より資料に沿って出版状況が報告された。IF (Impact Factor) については、大きな変動はないこと、掲載論文については国際的に幅広い引用がなされていることが示された。また、ERの論文は、掲載後、長期間にわたって引用される傾向があり、2年間の引用状況しか反映しないIFでは、その引用状況が適切に反映されにくいことが説明された。その後、久米編集長より、Ecosystem ecology, Global change, Stable isotope をキーワードに含む論文の引用数が多く、Insect, Evolutionary ecology のキーワードを含む論文の引用数が少ないことが紹介された。

b. Ecological Research Paper Award Vol. 31 (published in 2016) 受賞論文について

久米編集長より受賞論文の説明があり、今回の授賞論文にはForum (Kobori et al.) とData Paper (Takamura and Nakagawa) が含まれており、前者は引用数9、ダウンロード数は5000を超えていること、また、Springerの全ジャーナルを対象としたChange the World campaign全120論文中11位、Ecology分野ではトップというすばらしい結果であったことが紹介された。また、本論文の編集経緯について質問があり、久米編集長より具体的な説明がなされた。

c. 2017年の特集企画について

久米編集長より、現在、進行中の4つの企画について説明があった① Filling the Gaps: What's missing in the genotype-phenotype-population-ecosystem continuum?, ② Serpentine habitats as drivers of plant innovations, ③ Climate Change and Biodiversity Conservation in East Asia as a token of memory for 7th EAFES in Daegu, Korea, ④ Biodiversity and Its Ecological Functions in East-Asia and Pacific region: Status and Changes (tentative title)。それに伴い、現在、投稿量が急増しているが、今のところ編集対応には問題が無いことが説明された。

d. IXth International Conference on Serpentine Ecology の Special Issue (特集②) について

責任者のProf. Guillaume Echevarriaより、これまでの国際蛇紋岩生態研究グループの経緯と、今後のERでの特集編集方針について直接説明がなされた。その後、久米編集長より、AEIC待遇でゲストエディタとして招へいすること、またEchevarriaより30~40本

程度の高レベルの原稿を掲載予定であり、来年初頭には編集・審査を終えたいとの説明があった。Springer社より、どのような形態で掲載するのか確認があり、他の掲載論文とのバランスを取りつつ、分冊の形で掲載する方針が説明された。

e. 科研費申請「国際発信力強化」の申請方針について

今後の申請書作成方針、Plant Species Biology (PSB)の編集受け入れ、OA化について突っ込んだ議論がなされた。PSBをそのまま引き継ぐのではなく、ERをカテゴリー別に分けてPSBに相当する部門を創設する案についての議論や、他の学会での合同英文誌運営例などが紹介された。本件については、仲岡副編集長を中心に検討し、本年7月の理事会では方針を決定して申請することが確認された。

f. その他

Springer社から提案された新しいData PolicyについてSpringer社Flipsen氏より説明があり、編集委員との質疑応答が行われた。また、久米編集長より、領土問題に関連した地図表記について、その現状と潜在的な危険性が紹介され、編集員より海洋関係学会の事例などが紹介され、免責記述の必要性が提案された。いずれも仲岡副編集長が中心となって投稿規定を検討し、早期に改定することが了承された。

(文責：久米篤)

4. 日本生態学会誌刊行協議会

日時：2017年3月14日(火)

出席者：伊東明、名波哲、古賀庸憲、小林剛、村岡裕由、中川弥智子、高田宜武、大澤剛士、草刈秀紀、東樹宏和、岡部貴美子(オブザーバー)、伊藤貴子(土倉事務所)、鈴木晶子(編集事務)

a. 投稿、審査状況 (2017年3月10日現在)

	原著 受付	総説 受付	原著・総説			特集 受付	特集		学術 情報	学術 情報 特集	連載
			受理	却下	審査中		受理	審査中			
2017	1	1	1	0	1	0	0	0	1	0	2
2016	8	4	5	3	4	3(22編)	1(9)	2(13)	2	3(18編)	6
2015	4	5	6	3	0	7(50編)	7(50)	0	0	1(4編)	5

b. 刊行状況

67巻 (2017年) 刊行状況

	原著	総説	特集	学術 情報	学術 情報 特集	連載	その他・ 記事	合計	頁数
67巻1号	3	1	0	1	0	2	1	8	74

66巻 (2016年) 刊行状況

	原著	総説	特集	学術 情報	学術 情報 特集	連載	その他・ 記事	合計	頁数
66巻1号	0	1	2(14編)	0	2(11編)	2	2	30	270
66巻2号	0	1	4(25編)	0	0	1	3	30	278
66巻3号	0	2	2(15編)	1	1(4編)	3	0	25	194
計	0	4	8(54編)	1	3(15編)	6	5	85	742

65 卷（2015 年）刊行状況

	原著	総説	特集	学術情報	連載	その他・記事	合計	頁数
65巻1号	0	2	1(5編)	0	1	1	9	75
65巻2号	1	1	2(11編)	0	1	0	15	133
65巻3号	2	2	1(5編)	0	2	2	13	104
計	3	5	4(21編)	0	4	3	37	312

c. 日本生態学会誌投稿規定の改定

投稿資格 記事の第1著者および特集と学術情報特集の企画者は、正会員に限る。

特集の企画 特集（学術情報特集を含む）の企画を提案する際には、・・・（後略）。

査読（中略）学術情報、学術情報特集、意見は、編集委員会が掲載の可否を判断する。

ページ数の制限（中略）意見および、学術情報および学術情報特集の各論は6ページ以内とする。

原稿の構成（中略）学術情報、学術情報特集および意見の場合は、表題、著者の氏名・所属、本文から構成される。

著者による著作物の利用 著者個人又は著者が所属する法人若しくは団体のWebサイトにおいて、自身の記事を掲載する場合には（機関リポジトリへの保存及び公開を含む）、J-Stage および CiNii の当該記事へのリンクをすることが望ましいが、PDF そのものを掲載する必要がある場合には、学会（編集委員会）に通知するものとする。なお、利用にあたっては出典（本誌誌名、掲載巻号、ページ）を明記する。

d. 特集・学術情報特集の進め方

学術情報特集についての記述を追加した。
（文責：伊東明）

5. 保全生態学研究刊行協議会

出席者：長谷川雅美、横溝裕行、角野康郎、倉本宣、西廣淳、中越信和、細将貴、角谷拓、奥山雄大

a. 報告事項

投稿・編集状況

2016 年に投稿された論文の状況

	原著	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	意見・その他	合計
2016年新規投稿	15	5	14	0	2	2	4	42
受理	5	4	6	0	1	0	2	18
却下・取下げ	5	0	5	0	0	1	0	11
審査中	5	1	3	0	1	1	2	13

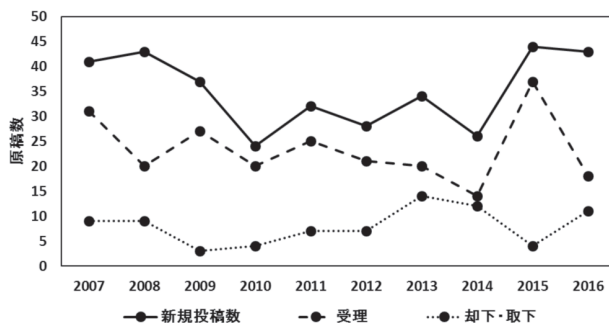


図 保全生態学研究への新規に投稿された論文数、受理された論文数、却下・取下げとなった論文数の推移。原著論文、総説・解説、調査報告、実践報告、保全情報の総計を示す。

b. 審議事項

① J-Stage 移行に伴うデジタル化

- ・ CiNii から J-Stage に移行した結果、ダウンロード可能なデジタルコンテンツが添付できるようになったことを踏まえ、付表を csv 等のファイルでダウンロードできるようにすることとした。導入にあたっては、J-Stage のファイルサイズ制限を確認し、必要に応じて規則を設けることとした。
- ・ 「冊子体は白黒であっても J-Stage に掲載する PDF ではカラーとする図版」を認めることとした。この場合は、カラー化の料金を徴収しないこととした。
- ・ 以上の変更に伴う投稿規定の見直し案を作成し、理事会に提案することとした。

② 編集の迅速化について

- 投稿数の増加に対し、編集作業が追いついておらず、最終判定までに時間がかかっている問題について議論された。特に担当編集者から「受理」の推薦がなされてから編集長が最終判定するまでの時間がかかりすぎている。これに対し、以下の意見が出された。
- ・ 担当編集者の担当内容を明確化し、そこに日本語・英語表現の確認などを含める。担当編集者の作業のチェックリストを作成する。
- ・ 投稿規程に、英文 Abstract について事前に英文校閲を受けることを推奨する文言を加える。
- ・ 特集を組む際は、企画者を明確にし、企画者が著者と投稿前に十分なやりとりをし、投稿のタイミングや内容の水準をそろえる。

③ 次期の編集体制について

現在の編集委員会の任期は 2017 年 12 月までである。7 月の理事会に次期編集委員長を提案、12 月の理事会に次期編集委員会を提案できるように、調整を進めることとした。

（文責：長谷川雅美）

6. 自然保護専門委員会

日時：2017 年 3 月 14 日（火）11:45 ~ 13:45

場所：早稲田大学 早稲田キャンパス（3 号館 302）

出席委員：現委員 20 名：露崎、紺野、黒沢、星崎、川上、吉田、和田、野間、中井、井上、内貴、増澤、加

藤、清水、阿部、常田、村上、水谷、神山、須賀

a. 議題及び出席者の確認

東北地区委員（黒沢委員、星崎委員）の承認

b. 審議および承認事項

① 2016年度活動費支出（1～12月）報告および2017年度活動費予算

2016年度活動費 78,900円（フォーラム講演者旅費およびアフターケア活動費）2017年度予算 125,000円（アフターケア活動費）

② 要望書に向けた取り組み

石狩海岸の風車建設計画中止を求める意見書
→自然保護専門委員会として意見書提出の方針を承認（環境大臣、北海道知事、事業者）

③ その他

日本ユネスコ協会連盟「未来遺産プロジェクト」の登録申請への推薦
→自然保護専門委員長名での「上関の自然を守る会」の推薦書提出を承認

c. 報告事項

① 要望書提出

近畿地方最後のアユモドキ繁殖地にスタジアム計画
(1)「種の保存法指定種及び文化財保護法の天然記念物アユモドキ保全に関する意見書」

<自然保護専門委員会他56団体>（2016/4/22）環境大臣、文部科学大臣宛

(2)「亀岡市都市計画公園及び京都スタジアム（仮称）の整備計画等に関する意見書」

<自然保護専門委員会他56団体>（2016/12/16）京都府知事、亀岡市長宛

② 法改正への提言

種の保存法改正に対し「里地里山の絶滅危惧種の保全に関する提言」を説明

<自然保護専門委員長>（2016/6/16）環境省研究会、（2017/2/14）自民党環境部会

③ 作業部会・アフターケア委員会報告

- ・外来種検討作業部会
- ・淀川問題検討委員会
- ・上関要望書アフターケア委員会
- ・石狩海岸風車建設事業計画アフターケア委員会
- ・中池見湿地アフターケア委員会
- ・濃飛横断自動車道路アフターケア委員会
- ・辺野古・高江ヘリパット問題

④ その他

・第64回大会におけるフォーラム開催について「日本の絶滅危惧種とその生息地を守るために何をすべきか？」

・リニア新幹線と南アルプス問題

（文責：吉田正人）

7. 外来種検討作業部会

開催日：2017年3月14日（火）9時半-11時半

場所：早稲田大学3号館302号室

出席者：村上・池田・大河内・川上・草刈・斎藤・常田・戸田・富山・中井・増澤・森本・（吉田・可知）

a. 報告事項

本年2月23日に特定外来生物専門家会合が開催され、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」の活用により、特定外来生物の追加指定の原案が作成された。今回は哺乳類・鳥類・昆虫類・陸生節足動物・その他の無脊椎動物について検討を行い、鳥類2種（シリアカヒヨドリ、ヒゲガビチョウ）昆虫類12種（マルバネクワガタ属10種、アカボシゴマダラ、クビアカツヤカミキリ）の合計14種が選定された。今後バブコメ等をへて夏頃に公示される予定。

哺乳類ではクマネズミ、ドブネズミ、ノネコ問題など（哺乳類学会と連携）が論議された。

b. 審議事項

① 外来種防除の優良事例についての検討

昨年来、防除の成功事例（失敗事例も）を全国的に集め検討するとともに、これらを基に防除マニュアルとしてまとめることにより、今後の防除活動を推し進めることとしている。今回は、当検討作業部会の委員が係っている外来種防除の優良事例の紹介と論議を行った。京都のアルゼンチンアリの防除、淀川における外来水草8種の防除（村上）、白山のコマクサ防除（増沢）、大分市のアライグマ防除（池田）、鹿児島県の外来種の侵入と絶滅の例（富山）、小笠原諸島における根絶例とその後の課題（大河内）、北海道における事例多数（斎藤）などの紹介と論議を行った。これらを簡単な形式でまとめることとした。これらを発展させて外来種ハンドブック初版の続巻として防除マニュアルを中心に作成予定である。

② 外来種問題に関する普及啓発について意見交換をした。

（文責：村上興正）

8. 将来計画専門委員会

日時：2017年3月14日（火）11:45-13:45

場所：早稲田大学早稲田キャンパス Room A（3号館301）

出席者（敬称略）：巖佐、北島、三木、粕谷、森長、佐竹、立木、小泉、奥田、酒井、田中、黒川、土居、彦坂、辻、占部（オブサーバ）、陀安（オブサーバ）

欠席者（敬称略）：五箇、塩尻、山道、中丸

① 若手支援策と会員数減少対策

提言1：学会内ボランティアのメンター制の試験的実施を→若手の会（など）に提言

提言2：予算をつけ学会のHPのポータルサイトとしての機能アップを→理事会等に提言

・プレスリリース（リンク）

・大学院紹介（体験談などの掲載）

・実習講習等の紹介（体験談などの掲載）

・学部生・初学者向けガイド「学会なんか怖くない」のHPアップ

・著書紹介、英文ネットコンテンツなどの解説

将来的には

・ネット授業の提供など

提言3：生態学関連の大学院合同説明会の関東関西で

の開催→理事会に提言

- ②私学理系教員選考会への生態学者の参加が可能性→キャリア支援委員会に提言
- ③生態学者が一丸となって大型予算を獲得するためのサポート
 - ・分野外への生態学の一層の普及努力
 - ・科研費の審査制度変化の会員への周知
 - ・大型研究費への応募促進の呼びかけ
- ④大会の国際化対応
 - 大会における視覚情報のバイリン化→大会企画委員会に提言
 - 大会プログラムの整理と日本語バリアフリー化を(英語シンポの講演者の名前が日本語標記になっている、名簿がアルファベット順でないなど)→大会企画委員会に提言
 - 総会・受賞講演会開催日における英語セッションの不足懸念。

(文責：辻和希)

9. 生態教育専門委員会

日時：2017年3月14日(火) 14:00～16:00

場所：早稲田大学早稲田キャンパス 3号館 501

出席：平山、嶋田、丑丸、可知

a. 2016年度合宿会議開催

日時：2016年10月1日(土)～2日(日)

場所：岐阜大学教育学部

出席者：丑丸・亀田・嶋田・中井・中田・西脇・平山・広瀬・三宅・畑田

①生態学会フォーラムの計画について

- 日時：2017年3月18日夕方(高校生ポスター発表会表彰式の後)
- テーマ：アクティブ・ラーニングで数回続けるのもよい。
 - ・評価方法が高等学校でも問題になっている。ペーパーテストでは判断できない。
 - ・去年は中等教育が中心だったので、今年は大学でのアクティブ・ラーニングの事例(ケーススタディ)を扱ってはどうか。
- 結論：パネルディスカッションを中心に実施。
 - ・話題提供するパネラーは6人×10分。
 - ・共通の項目(受講者数・受講者の属性・授業の目的・授業形態・授業デザイン・評価方法)などを予め聞いておき、資料として配布しておく。
 - ・アクティブ・ラーニングの実践について簡単に紹介し、後半はフロアから質問を集めて、議論する。
- フォーラムのテーマ：「アクティブ・ラーニングと生態教育-実践編-」
アクティブ・ラーニングは目的を達成するための手段である。
- パネラー：委員から2人(西脇、中井)、外部から4人(和歌山大学教育学部・古賀、熊本高校理科教師・溝上、九州大学理学部・粕谷、甲南女子大学・松村)
- 役割分担
企画者：西脇さん、司会&パネルディスカッション・

コーディネーター 畑田

事前資料準備係：亀田、アンケート作成：平山、事前資料フォーマット作成：畑田

- 生態学はアクティブ・ラーニングと親和性が高い。
 - ・理由を考えたり、議論したりすることで、単なる暗記ではなくなる。
 - ・座学で扱う内容こそ、アクティブ・ラーニングが必要。
 - ・教科書には事実だけを書くので、考察を載せられない。その結果、暗記になりがち。

②生態教育支援データベースの活性化について

- ・どうしたらデータを増やせるか? どうしたら存在を認識してもらえるか?
⇒写真・教材のコンテストをやる。
- ・リピーターを獲得するためには、定期的にコンテンツの数を増やすことが大事。毎日少しずつ変わるのが大事。最初は委員で頑張っただけでコンテンツを増やす。業者さんをお願いして、体裁を整えてもらう。そのようなスキルのある人をお願いする方法もある。
- ・トップページに新着情報(New! 5件)を載せる。データベースの趣旨も載せる。
- ・公開している教材のチェックもする必要あり。担当者を決めて、期限を決めてやる。誹謗中傷がないか程度の簡単なチェックでよい。

③日本生態学会誌特集と新たな連載の開始について

- ・すべての論文が採択され、2016年11月号に掲載。
- ・その号の日生誌表紙の写真はコケキットの写真はどうか。
- ・生態学教育に関する新しい連載を開始する。
 - 新しい知見を発信する場としても使える。
 - 前向きに考え、日生誌編集委員長と相談する。
 - 執筆者一人だと負担が大きいため、生態学教育専門委員会でバックアップする。
- ・学校便り(数年前広瀬さんが企画した連載)の内容を確認して、テーマが重複しないようにする。
- ・最初は生態学教育専門委員が書く。「連載を始めるにあたって」を一段落くらいつける(西脇)。昨年度のフォーラムの内容や、アンケートの結果も含めて、エッセイのようなものを執筆する(嶋田)。
- ・連載が了承されているのか、原稿の締め切りを確認する(三宅)。
- ・その次の連載は、松村さんをお願いしてみる。

(文責：西脇亜也)

10. 生態系管理専門委員会

a. 2016年度活動報告

①全体報告(鎌田委員長)

- ・2016年度の新しい方向性として自然再生演習とグリーンインフラ、Eco-DRR

②自然再生演習

- ・共感力養成講座の開催趣旨、及び活動概要について「日本生態学会自然再生演習 実施報告書」を用いて説明。(橋本)
- ・少人数(18名)を対象とした講習会であったが、

内容の濃いコンテンツ提供やコミュニケーションが実現でき、受講者の満足度も高かった。

- ・予算は受講料収入9万円・委員会予算約21万円、計約30万円で実施。
- ・本活動のノウハウの一部は、日本自然保護協会主催講習会や環境省レンジャー講習会にも活用され、波及している。
- ・委員からは取り組みをさらに発展できるように工夫するよう意見があった。

③ GI・Eco-DRRの展開について

- ・3月18日(土)に生態系管理専門委員会主催で開催するフォーラム(U07)の概要を説明し、開催内容等について意見交換を行った(西田)。
- ・グリーンインフラ・Eco-DRRに関する活動成果を和文誌の特集など文章化し、会員に幅広く意図を伝える方策を考えるべきとの意見があった。

④ 自然再生講習会アフターケア：麻機遊水地の取組(西廣)

- ・麻機遊水地の自然再生の取組について西廣氏より概要説明。最近出版された本で当地での活動を紹介するとともに、グリーンレジリエンスアワードを受賞する予定であることが紹介された。(西廣)
- ・全国的には国レベルの自然再生事業の申請件数は減っているが、小さな自然再生はむしろ増えている傾向がある。また初期の自然再生事業地では関係者の高齢化、新規担い手の参入が進んでいないという課題が発生していることが報告され、国内の自然再生事業に関する振り返り・レビューを委員会とし実施する事が必要との認識で一致した(委員会内でのヒアリング・アンケートの実施)

⑤ 自然再生講習会アフターケア：宝が池(鎌田)

- ・宝が池での事業の現状について鎌田氏より報告があった

⑥ その他(橋本)

- ・平吹さんから「大津波が襲来した仙台湾南部の海岸・平野域における自然環境の現状」についての紙面報告があった。

b. 2017年度活動方針

① 自然再生講習会企画案(鎌田)

- ・沖縄でのマングローブ再生活動がはじまっており、活動の促進を図るために当地で自然再生講習会を実施したい。当再生事業がグリーンインフラとしての価値があることが認知されるきっかけとしたい。
- ・講習会1日(室内)でオプションとしてエクスカッションの実施も検討する。
- ・名称を「生態系管理講習会」とすることが提案され、了承された。
- ・自然再生演習と並行して実施するので、本部からの予算措置(増額)も依頼することで全会一致した。

② 自然再生演習(橋本)

- ・昨年度は、一定の成果が得られており、基本内容を踏襲して開催
- ・阪神間のアクセスがいいところで開催すること、新規受講者を20名確保すること、受講料を5000円か

ら10000円に値上げすることなどが確認された。

- ・外部団体(例えば、日本自然保護協会など)との連携することも将来的には視野に入れる、将来的には独立採算で実施出来るよう検討すること、受講者が受講によって得られるもの(効果)をより際立たせることなどの課題が提示された。
- ・名称を「生態系管理演習」にする事が提案され、了承された。

③ 専門委員会のあり方

- ・2018年度の委員改選にむけて、当委員会の委員選定のあり方を検討する必要がある旨、委員長より提案があり、議論された。
- ・結果、改選にあたって数値を伴うルールを定めること(学会内での生態系管理に関わる人材の確保・養成)、当委員会のミッションを再確認(必要によっては一部変更を検討)することが提案され、2017年冬までに事務局(委員長、副委員長、幹事)を中心に検討することが確認された。

例) 改選で交替する委員数を定める(1/3~1/2の人員を交替、など)

再任回数に上限を設ける(再任3回など)

離任後にも委員会に参画したい学会員についてはオブザーバーとして参加を認めるなど

(文責：鎌田磨人)

11. 大規模長期生態学専門委員会

2017年3月14日 14:00-16:00

出席者：日浦勉、大手信人、黒川絃子、中村誠宏、石井 励一郎(オブザーバ)、木庭啓介(オブザーバ)

欠席：三枝信子、仲間雅裕、中野伸一、正木隆、伊東明 活動報告

① 日本学術会議大型研究計画

京都大学生態学研究センターからJaLTERなどのフィールドネットワークを活かした観測の内容で申請され、マスタープラン2017に掲載された。今後マスタープラン2020に向け大改訂の準備を開始する。

環境学分野へは国環研から申請され(全球及びアジアの温室効果ガスと大気汚染物質排出監視)は重点大型研究計画に記載された。

② Future Earth

第5回Future Earthアジアワークショップが開催され、GLP、GCPなどのオフィスからメンバーが集まりアジアでのFEの活動について議論した。

3月15日日本大会自由集會開催 地域スケールからナショナル・グローバルスケールへ

来年度札幌大会において大規模長期委員会主催でFE関連のフォーラムを開催予定

③ ベルモントフォーラム

仲間代表で今年度はFSを行った。

④ GEOSS-AP, AP-BON

2020年までのアクションプランを議論。まずはデータシェアリング

中国にCTFS仕様の15-30haプロットを13個、他1-5haプロットを60個設置予定。林冠クレーンも既

設2基を含め計7基設置予定。

⑤ JaLTER

- ・個人で維持している森林プロット関係者を集めて解析ワークショップを開く。最低限ERデータペーパーに投稿したい。他分野の人の意見も組み入れて今後の展開も議論する。
- ・JaLTER-All Scientist Meetingを本年秋に島根大で開催。

⑥ 委員会予算

ILTERへの拠出金がこれまで年間約8万円だったが、増額を要求されている。対応せねばならなくなった場合、委員会予算増額を要求したい。前述JaLTER-ASM開催のため旅費補助20万要求したい。

(文責：日浦勉)

12. 野外安全管理委員会

出席者：鈴木、大館、飯島、北村、石原

a. 2016年度活動報告

- ・野外調査安全管理マニュアル出版準備
写真・図の準備を進めている。
救急救命法の転載許可の交渉中。
- ・2016年大会でのランチョンセミナー、ポスター掲示
16年の大会でのランチョンセミナーを実施。参加者は約20名。質問もでて一定の成果をあげたが、参加者数は例年の1/3程度にとどまった。原因は不明だが、大会最終日だったためか。ポスターも掲示し、熱心な質問を受けた。
- ・2017年大会でのランチョンセミナーとポスター
17年の大会でのランチョンセミナーとポスター展示の準備を進めた。
- ・事故情報の提供依頼
残念ながら、16年度には事故情報の提供があった。

b. 2017年度活動予定

- ・野外調査安全管理マニュアル出版
2017年10月中旬に脱稿の予定
- ・2017年大会でランチョンセミナーを実施する。ポスター展示も行う。
- ・2018年大会でのランチョンセミナー
例年実施している野外調査の初心者を中心とした安全対策の啓発セミナーに加え、実習的な要素を含むフォーラムを次年度も企画・実施する。
- ・事故情報の収集と集約
引き続き、野外調査、実習中の事故や冷やりハッと事象の例を収集し、解析を続ける。該当の事例があれば、野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示ください。

(文責：鈴木準一郎)

13. キャリア支援専門委員会

2017年3月14日 14:00～16:10

早稲田大学早稲田キャンパス3号館305 (Room C)

委員：中坪、宮下、上野、大西、黒瀬、鈴木(智)、高村、西田、沼田、別宮、水野

オブザーバー：木村、半場、深谷、三宅

新委員(4月1日-)：鈴木(牧)、曾我

執行部：占部副会長 (株) グレイスより2名(最初のみ)

a. 東京大会での企画について

- ・男女共同参画ランチョンフォーラム(3月15日)
- ・キャリア支援フォーラム+企業との交流会(3月16日)
- ・企業パンフレット展示(31社+a)
- ・子ども生態学講座(3月18日：参加予定者9名)
- ・託児室・ファミリー休憩室

b. 来年度の活動計画について

- ① Gender Summit 10. (5月25日～26日)
 - ・日本生態学会は Pearl Sponsor として協賛金10万円を支出
 - ・中坪名で Registration (1月27日) 生態学会より参加費3万円支出
 - ・ポスターは大西委員が作成中
 - ・当日は大西委員が参加 他の委員が参加できるか情報を収集する
- ② 男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加(年4回程度)
- ③ 男女共同参画学協会シンポジウムへの参加(年1回)
学協会シンポ用ポスター作製
- ④ 女子中高生夏の学校 実施予定
- ⑤ 東北大環境機関コンソーシアムおよびPEMプログラムとの連携 未定
- ⑥ キャリア支援専門委員会HPの運営、メーリングリスト、Pukiwiki管理

c. 札幌大会に向けた準備

- ・男女共同参画ランチョンフォーラム 実施 学協会アンケート報告等
- ・キャリア支援フォーラム+企業との交流会
フォーラムは実施する方向
企業交流会は東京大会の結果(グレイスの報告)次第
- ・企業パンフレット展示 グレイスに委託できない場合は負担にならない程度で実施
- ・子ども生態学講座 学会内では実施しない 自然学校等の情報を収集
- ・託児室・ファミリー休憩室 実行委員会のサポート
- ・実行委員会との連絡は委員長(中坪)が担当

d. その他

- ・「生態学の展望」報告書について
- ・次期委員会体制
委員の公募を行うか 今後検討する

(文責：中坪孝之)

14. 電子情報委員会

出席 竹中、久保、大澤、真板、池田(オブザーバー)

欠席 富田

- ① 学会で契約しているレンタルサーバ(以下、学会サーバ)上でこれまで稼働していたシステムのうち、大会登録システムおよび会員管理システム関連部分は外部委託に移行した(ごく一部は引き続き学会サーバで稼働中)。ウェブ選挙システムも移行の予定。

- ②昨年4月に作成した、学会サーバ上で提供するサービスの利用案内を各種委員会・地区会に周知した。ひとつの専門委員会からメーリングリスト開設の希望があり、対応した。今後も年に一回、同様に利用案内の周知を行う予定。
- ③現在、学会サーバ上で稼働中のメーリングリストおよびウェブページ用スペースのうち、利用実態がないものについて整理を進めることを確認した。
- ④学会サーバのシステムはかなり古く、それにとまとう不具合が疑われるケースも生じている。どの程度のアップデートが可能か業者に確認の予定。
- ⑤現在、OSレベルのシステム管理は1名の委員が担当している。作業量自体は多くはないが、不慮の事態があった場合を考えると、委員会内のバックアップ体制の構築、ないしは管理の外部委託の検討が必要。たとえば、理事会に電子情報担当を置き、学会事務局で担えない実質的管理業務は外部委託し、電子情報委員会は解消するという方向も考えられる。今年1年で可能なオプションの検討を進める。

(文責：竹中明夫)

15. 大会のあり方検討部会

a. 経過報告

- ・大会運営における現状認識と課題、および改革方向性について、2016年3月の仙台大会総会第2部にて報告した。齊藤隆会長(当時)より、改革の考え方3点が示された。①学会・大会の魅力を高める、②運営の負担を減らす、③健全な予算構造の確立。
- ・2016年4～5月に実施した第1回会員アンケート結果をもとに、大会改革案(試案)を作成し、大会のあり方検討部会と理事会から意見収集してきた。
- ・大会運営電子システムを管理運営している国際文献社にヒアリングし、システム変更もしくはヘルプデスク(人)対応で、改革対応が可能であることを確認した。
- ・東京大会にて、フォーラム「U08:学会大会の改革:自由集会は必要か?」(3月18日(土)12:00～13:00A会場)を開催し、会員から意見を伺う。4月以降に、第2回会員アンケートを実施予定。

b. 大会改革案(20170218 試案)

①各種集会について

1. (新)シンポジウムとフォーラムのみに簡素化する一方、自由集会や企画集会の長所を活かした(新)シンポジウムを設計する。
2. (新)シンポジウムの詳細は、下記とする。
 - ・2時間枠に統一する。
 - ・企画内容への関与・審査は廃止する。ERシンポの応募は現状を継続する。
 - ・発表の重複制限を廃止するが、2回以上の発表には発表費(1回につきX千円)を課す(例、発表1回は無料(大会参加費のみ)、2回は発表費×1を追加課金、3回は発表費×2を追加課金、等)。
 - ・企画は、会員のみ可とする(現状通り)。
 - ・非会員によるシンポジウムでの講演を奨励し、発表

が初めての場合は、大会参加費を免除するとともに、自動的に会員登録する(1年目の年会費は免除、ニュースレターのみ発送)。2年日以降は、(年会費を支払えば)会員として発表可能となる。

3. フォーラムは現状を継続するが、委員会活動との関連が理解されやすい内容とするよう、配慮する。

②一般講演について

- ・口頭発表およびポスター発表は、現状を継続する。
- ・会員のみ発表可とする(現状通り)。
- ・口頭発表用ファイルの事前登録は廃止し、会場備付けのPCに発表者自らが登録する。
- ・ポスター発表賞は現状を継続するが、審査方法の簡素化を可能な範囲で進める(企画委員会ポスター部会に一任)。

③総会・受賞講演について

- ・総会および授賞式は、現状通り、プレナリーで実施する。
- ・受賞講演は、プレナリーとパラレルの両案を検討する(第2回アンケート結果を参考にする)。

④未来の生態学者の拡大について

- ・学部学生以下の大会参加費は、現状通り、免除する。
- ・高校生ポスター発表会は継続するが、運営可能な範囲で実施する(企画委員会高校生ポスター部会に一任)。
- ・ジュニア生態学講座は継続するが、運営可能な範囲で実施する(企画委員会高校生ポスター部会に一任)。

⑤国際化について

- ・英語口頭発表賞は継続するが、運営可能な範囲で実施する(企画委員会英語口頭発表賞部会に一任)。
- ・英語による講演が全ての時間帯で開催され聴けるよう、英語発表数の増加を検討するとともに、プログラム編成において留意する。

⑥公開講演会について

- ・公開講演会の開催は、現状通り、実行委員会を中心に企画し実施する。
- ・Web配信することを検討する。

⑦託児所・ファミリー休憩室・企業出展協賛について

- ・学会事務局が中心となり、実行委員会・企画委員会と協力して運営する。

⑧会場内Wi-Fi環境について

- ・Wi-Fi環境を恒常的に整備する(可能な限り)。

⑨大会会計について

- ・大会参加費・懇親会費などは、現状通り、実行委員会と理事会が相談して決める。学会財政との関連については、今後も検討を続ける。
- ・新たに、一日参加の参加費設定を検討する。大会当日受付(ヘルプデスク)で受付・集金を対応。

⑩企画委員会のリクルートについて

- ・キャリア支援委員会の例を参考に、委員の公募を検討する。

2016年7月理事会での指摘事項(概要)

- ・受賞講演の実施方法について、判断材料としてプレナ

リーとパラレルでのプログラムを提示してはどうかとの意見があった。

- ・大会について集会のコンテンツはそのままでもよいのではないか。むしろ値上げしてもよいか？開催地を大学か、コンベンションか？地区持ち回りを続けるのか？といった点を見直してはどうか。また、企画委員会が大変という声があるが、責任感と権限、インセンティブを与える科学委員会のように少人数で、2～3日ですべて集まって決めるなど、企画委員会のやり方そのものを見直すことができないかという提案があり、意見が交わされた。
- ・企画委員会のリクルートの問題について、昨年キャリア支援委員会で公募をやってみたら7人応募があった。応募された方はモチベーションが高い。企画委員会も公募をしてみてもどうかと意見があった。

2016年12月理事会での指摘事項（概要）

- ・大会改革を北海道大会から近畿大会での実施が現実的、実施を1年延ばすことが承認された。
- ・重複発表を認めると、プログラム編成の作業がたいへんになる。業務軽減という目的から外れてしまうのではないか。
- ・重複発表で課金ではあまり抑制にならないのでは？
⇒重複を認めるが相応の費用負担を求める、そのうえでもある程度の制約が必要なのではないかとの意見があった。
- ・非会員の発表1回目は無料、2回目で会員にというのは系統的に可能なか？系統的な検討からしていくのが良いのではないかと意見があった。
⇒まず国際文献社に系統的に可能かどうか打診する。（その後、国際文献社に確認し、基本的に、システムで対応できないことはないが、費用対効果の面から、ヘルプデスク対応（人による個別対応）がベターのこともある。個別に相談していきたい。
- ・大会参加費徴収についてはあまり問題ないのではないかと意見があった。1日参加については、当日参加の受付のみにしたらよいのでは。
- ・登録を遅れた人のポスター発表スペース確保も検討してほしいとの意見があった。
- ・東京大会のフォーラムで「自由集会は必要か？」議論する。
- ・これまで自由集会で講演依頼をしていた人が、重複発表の制限から講演を依頼し辛くなるのではとの意見があった。
- ・この件は理事会承認事項、来年の今頃には方向を決める必要がある。
- ・学生・PDが積極的にシンポ企画できるようにすることも考慮する必要があるとの意見があった。
- ・聴講学部生の参加費無料、高校生ポスター発表など生態学の裾野を広げる活動もしているので、学生・職のない方が積極的に参加できるように考えてほしい。→次回のアンケート結果をクロス集計し、意向を分析する。
- ・大会の会員へのサービス維持して行くためには参加費

についても今後検討していく必要があるだろう。他学会の大会の会場や参加費などについて、情報を集めた。参考例があればよいとの意見があった。

2017年2月理事会での指摘事項（概要）

- ・国際文献社の大会参加申し込みと発表申し込みが独立しており、先に発表を申し込みその後参加申し込みならば重複発表の費用徴収が可能。
- ・1日参加システムよりもヘルプデスクで対応可能
- ・3月の大会フォーラムで改革案（発表者の範囲。費用は1件につき課金。シンポジウムは発表者全員。招待者、1年目無料自動的に会員になる。2年目以降降会員として発表してもらおう等）を会員に聞き、春以降第2弾のアンケートを実施する。

c. スケジュール

2016年

8月～11月 改革具体案の検討
12月 理事会（改革具体案の審議）

2017年

3月 東京大会にて、フォーラム開催
4月～ アンケート第二回の実施と分析、改革具体案の修正
7月 理事会（改革具体案の審議）
12月 理事会（改革具体案の確定）

2018年

3月 北海道大会にて、代議員会・総会にて報告
4月～ 近畿大会に向けて実施

（文責：吉田丈人）

16. 日本学術会議の活動報告

- (1) マスタープラン2017の選考が行われた。生態学関連から出されたものは、2016年9月に行われた重点大型研究計画への面接まで進んだものが1つあったが、最終的には重点大型研究計画には採択されず、学術大型研究計画となった。
- (2) 以前から準備していた「生態学の展望」を報告として発出するべくすすめている。統合生物学委員会より第2部に提出し、査読コメントを受け取ったので、掲載に向けて改訂中である。今期中に発出することを目指している。
また日本生態学会の会員へのアクセスを考え、何らかの形で生態学会の発行する印刷物などに掲載する計画である。
- (3) 2017年の秋から日本学術会議の第24期がはじまる。そのため会員および連携会員の人数が現在行われつつあり、日本生態学会からも数名を推薦した。
- (4) 日本学術振興会科学研究費の審査方法が変更される。基盤B、Cおよび若手については、小区分（従来の細目に相当）で審査を受け、2段階書面審査で採否が決まる。基盤Sは、大区分（生物系科学全体）で面接審査を受ける。基盤Aおよび挑戦的研究は中区分（生物系科学を4つに分けたもので、生態学が含まれるのは「個体から集団の生物学および人類学」）で審査を

受け、総合審査方式（書類を読んだ審査委員が合議で決定する）というやり方にかわる。審査分野は融合する傾向にあるため、より広い分野の委員にアピールするように申請書類を書く必要がある。

（文責：巖佐庸）

17. 学会財政改革について

1. 学会誌とニューズレターの冊子体印刷・配送を廃止する（ただし、学会誌の冊子体を希望する会員にはオンデマンド印刷により有料配布。非会員の定期購読は継続。ニューズレターは会員に一斉メール送信）。※
2. 年度予算の繰越金（地区会費を除く）が3000万円を下回る場合、単年度収支の赤字額は、原則として大会参加費予算の増額により補てんする。
3. 正会員の会費は、一般が現行の平均水準（11700円）を超えない額とし、学生は一般の半額程度とする。
4. 賛助会員の会費は、生態誌と保全誌の冊子体購読費等に基づき、別途、定める。
5. 低収入の国に在住する会員に対する優遇措置を検討する。
6. 民間からの寄付を受け付ける窓口を設置する。
7. この改革案は札幌大会総会で決議し、2019年1月より施行する。

※冊子体廃止の導入効果は、ER（東京大会で導入の可否を決議）で300万円、生態誌で150万円、ニューズレターで50万円の支出削減（保全誌は未定）。

（文責：池田浩明）

B. 審議事項

第1号議案 役員退任に伴う改選に関する件

議長は、以下の理事および監事が本定時総会の終結と同時に任期満了し、退任することになるので、その改選の必要がある旨を述べた。なお、古賀庸憲は平成28年3月23日開催の定時総会において任期を就任後1年内最終決算期にかかる定時総会の終結時までと短縮している。

任期満了理事 岡部貴美子、石井励一郎、池田浩明、古賀庸憲、長谷川雅美

任期満了監事 陶山佳久

なお、選任にあたっては定款のとおり、理事会の推薦する理事及び監事候補者を参考とすることが提案され、一同これを承認したので、下記の者を指名し、この者につきその可否を諮ったところ、満場異義なくこれに賛成したので、下記のとおり可決確定した。

理事 陀安一郎、木庭啓介、北村俊平、伊東明、

長谷川雅美

監事 岡部貴美子

理事長長谷川雅美については任期を就任後1年内の最終決算期にかかる定時総会の終結時まで短縮することが満場異義なく承認可決された。なお、被選任者は席上その就任を承諾した。

第2号議案 2016年度事業報告決算に関する件

当期（自2016年1月1日至同年12月31日）における決算について満場異義なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
	16 予算	16 決算		16 予算	16 決算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	29,100,000	29,404,300	ER	13,750,000	12,703,898
正会員（学生）	6,700,000	7,198,280	生態誌	4,000,000	5,305,184
賛助会員	1,900,000	2,268,000	保全誌	2,000,000	1,566,188
地区会費	300,000	762,900	ニュースレター	1,000,000	803,412
小 計	38,000,000	39,633,480	ER 英文校閲・翻訳	3,500,000	2,238,419
ER 売上還元金		1,750,000	ER 誌 Open Access 経費	2,000,000	2,728,948
学会誌売上げ	1,050,000	1,007,314	ER 広報費	1,000,000	0
			和文誌編集費	700,000	577,385
科研費			小 計	27,950,000	25,923,434
国際情報発信強化 A	16,600,000	16,600,000	会議費	150,000	56,894
公開講演会	1,300,000	1,400,000	旅費・交通費	3,500,000	2,857,548
小 計	17,900,000	18,000,000	人件費	13,500,000	14,406,671
出版印税	1,100,000	1,180,537	地区会活動費	3,300,000	2,007,309
広告代	180,000	180,000	大会支出	24,000,000	23,632,711
著作権使用料	500,000	482,054	キャリア支援活動委託費	540,000	540,000
ER 超過ページ代	0	0	公開講演会	1,400,000	1,400,000
大会収入	24,000,000	23,167,800	INTECOL 会費	450,000	446,754
講習会費	100,000	90,000	事務費		
その他	10,000	18,720	通信費	550,000	451,145
前年度繰越金	77,884,531	77,884,531	消耗品費	300,000	168,619
			雑費	200,000	193,864
			銀行手数料	200,000	552,556
			レンタルサーバ料	470,000	479,520
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	100,000	128,256
			小 計	3,500,000	3,653,960
			各種委員会費	1,500,000	1,450,961
			選挙費	0	0
			EAFES 費用	200,000	194,942
			講習会費	400,000	293,578
			学会運営改革推進費		
			会員管理委託費（初期）	2,257,200	3,023,613
			会員管理委託費（経常）	4,050,000	4,080,369
			大会運営委託費（初期）	1,378,080	101,660
			小 計	7,685,280	7,205,642
			法人税	500,000	706,000
			次年度繰越金	72,149,251	78,618,032
合 計	160,724,531	163,394,436	合 計	160,724,531	163,394,436
単年度収入	82,840,000	85,509,905	単年度支出	88,575,280	84,776,404

<特別会計>

宮地基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	16 予算	16 決算		16 予算	16 決算
前年度繰越金	1,463,480	1,463,480	宮地賞賞金	332,313	334,110
預金利息	0	129	雑費	1,620	1,620
			次年度繰越金	1,129,547	1,127,879
合 計	1,463,480	1,463,609	合 計	1,463,480	1,463,609

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	16 予算	16 決算		16 予算	16 決算
前年度繰越金	8,512,247	8,512,247	大島賞賞金	0	0
預金利息	0	763	雑費	0	0
			次年度繰越金	8,512,247	8,513,010
合 計	8,512,247	8,513,010	合 計	8,512,247	8,513,010

鈴木賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	16 予算	16 決算		16 予算	16 決算
前年度繰越金	4,495,890	4,495,890	鈴木賞賞金	150,000	150,000
預金利息	0	403	雑費	1,620	1,620
			次年度繰越金	4,344,270	4,344,673
合 計	4,495,890	4,496,293	合 計	4,495,890	4,496,293

第3号議案 2017年度予算に関する件

次期（自2017年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場異義なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
	16決算	17予算		16決算	17予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	29,404,300	29,400,000	ER	12,703,898	12,700,000
正会員（学生）	7,198,280	7,000,000	生態誌	5,305,184	4,500,000
賛助会員	2,268,000	1,900,000	保全誌	1,566,188	2,000,000
地区会費	762,900	700,000	ニュースレター	803,412	1,000,000
小計	39,633,480	39,000,000	ER 英文校閲・翻訳	2,238,419	2,500,000
ER 売上還元金	1,750,000	0	ER 誌 Open Access 経費	2,728,948	3,000,000
学会誌売上げ	1,007,314	1,000,000	和文誌編集費	577,385	700,000
科研費			小計	25,923,434	26,400,000
国際情報発信強化 A	16,600,000	16,600,000	会議費	56,894	100,000
公開講演会	1,400,000	1,300,000	旅費・交通費	2,857,548	3,000,000
小計	18,000,000	17,900,000	人件費	14,406,671	14,580,000
出版印税	1,180,537	1,000,000	地区会活動費	2,007,309	2,000,000
広告代	180,000	180,000	大会支出	23,632,711	23,000,000
著作権使用料	482,054	400,000	キャリア支援活動委託費	540,000	
大会収入	23,167,800	23,000,000	公開講演会	1,400,000	1,400,000
講習会費	90,000	100,000	INTECOL 会費	446,754	450,000
その他	18,720	20,000	事務費		
前年度繰越金	77,884,531	78,618,032	通信費	451,145	450,000
			消耗品費	168,619	300,000
			雑費	193,864	200,000
			決済代行手数料	552,556	650,000
			レンタルサーバ料	479,520	480,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	128,256	100,000
			小計	3,653,960	3,860,000
			各種委員会費	1,450,961	2,250,000
			選挙費	0	950,000
			EAFES 費用	194,942	200,000
			講習会費	293,578	300,000
			会員管理委託費（初期）	3,023,613	0
			会員管理委託費（経常）	4,080,369	4,500,000
			大会運営委託費（初期）	101,660	1,400,000
			Web 選挙（初期）		700,000
			法人税	706,000	400,000
			次年度繰越金	78,618,032	75,728,032
合計	163,394,436	161,218,032	合計	163,394,436	161,218,032
単年度収入	85,509,905	82,600,000	単年度支出	84,776,404	85,490,000

<特別会計>

宮地基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	16 決算	17 予算		16 決算	17 予算
前年度繰越金	1,463,480	1,127,879	宮地賞賞金	334,110	445,480
預金利息	129	0	雑費	1,620	2,160
			次年度繰越金	1,127,879	680,239
合 計	1,463,609	1,127,879	合 計	1,463,609	1,127,879

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	16 決算	17 予算		16 決算	17 予算
前年度繰越金	8,512,247	8,513,010	大島賞賞金	0	222,740
預金利息	763	0	雑費	0	1,080
			次年度繰越金	8,513,010	8,289,190
合 計	8,513,010	8,513,010	合 計	8,513,010	8,513,010

鈴木賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	16 決算	17 予算		16 決算	17 予算
前年度繰越金	4,495,890	4,344,673	鈴木賞賞金	150,000	150,000
預金利息	403	0	雑費	1,620	1,620
			次年度繰越金	4,344,673	4,193,053
合 計	4,496,293	4,344,673	合 計	4,496,293	4,344,673

第4号議案 入会及び会費規則の改定に関する件

入会及び会計規則の改定案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場異義なくこれを承認可決した。

一般社団法人日本生態学会入会及び会費 規則 (案)

- 第1条 本法人の入会については、本法人の定款に定められたことのほかは、この規則による。
- 第2条 本法人の会員になろうとする者は、入会申込書に所定の事項のすべてを記入し、当該年度の会費を添えて、所定の窓口へ提出しなければならない。
- 第3条 入会に際し、全ての入会希望者は、正会員、賛助会員のいずれかから会員資格を選択するものとする。
- 第4条 既納の会費（送金手数料を含む）は、いかなる事由があっても返還しない。ただし、理事会が入会を承認しなかったときは、入会申込書に添えて提出された当該年度の会費は、これを返還する。
- 第5条 本法人の会費については、本法人の定款に定められたことのほかは、この規則による。
- 第6条 会費は当該会計年度の間、年額の全額を納入しなければならない。
- 第7条 会費は、年額を分割して納入することができない。
- 第8条 本法人の会員の会費は、次に掲げる基本会費、冊子体購読費、地区会費の合計額とする。

	基本会費	冊子体購読費 (送料込)*	地区会費**	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員 (一般)	9500円	ER: 8000円 生態誌: 600円 (送料のみ) 保全誌: 2000円	総会で認められた額	○	○
正会員 (学生)	6500円	ER: 8000円 生態誌: 600円 (送料のみ) 保全誌: 2000円	総会で認められた額	○	○
賛助会員 (個人・団体)	6000円	ER: 8000円 生態誌: 6000円 保全誌: 2000円	0円	×	×
名誉会員	0円	0円	0円	○	×

* 冊子体購読費

本法人の会員には、希望があれば、次の学会誌の冊子体を有料（冊子体購読費）で配送する。

- ① ER: Ecological Research（年6回発行）
- ② 生態誌：日本生態学会誌（年3回発行）
- ③ 保全誌：保全生態学研究（年2回発行）

** 地区会費

海外在住の正会員からは地区会費を徴収しない。

第9条 本法人では所得の少ない正会員（一般）のために、以下の要件をすべて満たす場合には、本人の申請に基づいて翌年度の年会費を正会員（学生）と同額にする措置を実施することができる。

①年間所得が200万円以下

②申請時点で当該年度の学会費が納入済である事

第10条 本法人の非会員に向けた学会誌（冊子体）の定期購読料は、以下に掲げる年額とする。なお、Ecological Researchの定期購読は、出版社との契約事項により、本法人では受付けない。

①日本生態学会誌 9000円

②保全生態学研究 5000円

第11条 この規則の改訂は総会の承認を得なければならない。

附則

①この規則は、平成26年1月24日から施行する。

②この規則は、平成29年3月17日に改定し、平成30年1月1日から施行する。

第5号議案 第67回大会（2020年）担当地区会に関する件

第67回大会（2020年）担当地区会候補中部地区の提案があり満場異義なく承認可決した。

Ⅱ. 第64回日本生態学会大会の記録

第64回日本生態学会大会は早稲田大学早稲田キャンパスを会場として2017年3月14日～3月18日に開催されました。

大会期間中に公開講演会、シンポジウム14、フォーラム9、企画集会17、一般講演（口頭発表）264、一般講演（ポスター発表）955、高校生ポスター52、自由集会35、ジュニア生態学講座、こども生態学講座が行われました。参加者は2814名でした。5日間の日程とポスター賞・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日程

3月14日 代議員会、各種委員会（大会企画委員会、Ecological Research 刊行協議会、日本生態学会誌刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、野外安全管理委員会、キャリア支援専門委員会、電子情報委員会）、自由集会

3月15日 シンポジウム、企画集会、一般講演（口頭発表・ポスター発表）、フォーラム、自由集会

3月16日 シンポジウム、企画集会、一般講演（口頭発表・ポスター発表）、フォーラム、懇親会

3月17日 総会、各賞授賞式、受賞講演、会員の集い、自由集会

3月18日 公開講演会、企画集会、フォーラム、高校生ポスター、ジュニア生態学講座、こども生態学講座

ポスター賞受賞者

<進化>

【最優秀賞】

「性はなぜ維持されるのか：シロアリにおける遺伝的多様性喪失のコスト」* 藤田忠英（京大院・農・昆虫生態）、南波佑介（京大院・農・昆虫生態）、松浦健二（京大院・農・昆虫生態）

【優秀賞】

「日本産メスジゲンゴロウ属における性特異的な形態進化」* 清川僚（弘前大学）

<生物多様性>

【最優秀賞】

「ヤノクチナガオオアブラムシにおける体表面炭化水素の地域間比較：異なるアリ種との共生はアブラムシの地域適応を引き起こすのか？」* 山本哲也（信大院・総合工学）、服部充（長崎大・環境）、乾陽子（大教大・教育）、市野隆雄（信大・理、山岳）

【優秀賞】

「DNA バーコードを用いたボルネオ熱帯雨林樹木の群集系統とハビタットの関係」* 殷亭亭（大阪市大・理）、名波哲（大阪市大・理）、伊東明（大阪市大・理）、松山周平（酪農学園大・農食環境）、Stuart Davies（CTFS）、Tan Sylvester（CTFS）、Mohizah B. Mohamad（サラワク森林局）

「同所的近縁種が多い熱帯雨林樹木 *Shorea* 属と *Syzygium* 属の生態特性と系統の関係」* 奥野聖也（大阪市大・理）、川本夏帆（大阪市大・理）、名波哲（大阪市大・理）、伊東明（大阪市大・理）、B. Mohamad Mohizah（サラワク森林局）

「遡上時期の異なるサケ集団間での至適水温範囲の違い」* 阿部貴晃（東大大気海洋研）、北川貴士（東大大気海洋研）、牧口祐也（日大生物資源）、佐藤克文（東大大気海洋研）

<動物と植物の相互関係>

【最優秀賞】

「被子植物における新規の送粉シンドローム：微小双翅目による送粉の生態と進化」* 望月昂（京大大学生態学研究センター）、川北篤（京大大学生態学研究センター）

【優秀賞】

「都市化による機能群多様性の減少が植物 - 送粉者ネットワークに与える影響」* 清水健将（神戸大・人間発達環境）、平岩将良（神戸大・人間発達環境）、丑丸敦史（神戸大・人間発達環境）

「花の見つけやすさが、マルハナバチによる報酬量と位置の連合学習に与える影響」* 辻本翔平（富山大学）、石井博（富山大学）

「ポリネーター相の違いが生み出す、群集間の花色組成の違い」* 渡邊裕人（富山大学）、辻本翔平（富山大学）、久保田将裕（富山大学）、角屋真澄（富山大学）、工藤岳（北海道大学）、石井博（富山大学）

<動物個体群>

【最優秀賞】

「シロアリの家計簿：コロニー創設における資源配分と

腸内微生物量の動態」* 稲垣辰哉（京都大学）、淵側太郎（京都大学）、松浦健二（京都大学）

【優秀賞】

「沖縄島のリーフエッジにおけるクマノミ類の繁殖コロニーの安定性」* 林希奈（琉球大学理学部）、REIMER James（琉球大学理学部）、立原一憲（琉球大学理学部）

「状態空間モデルを用いた実河川におけるイワナ半天然魚と継代魚の生残率の比較」* 山下耕憲（群馬県水産試験場）、岩崎雄一（東洋大学生命環境科学研究センター）、松原利光（群馬県水産試験場）、星野勝弘（群馬県水産試験場）、鈴木究真（群馬県水産試験場）、神澤裕平（群馬県蚕糸園芸課）、松岡栄一（群馬県水産試験場）

<保全>

【最優秀賞】

「人口減少する農村におけるため池の水生植物相の将来：社会的条件の空間異質性と種特性を考慮したシミュレーション」* 外山史也（東京農工大学）、赤坂宗光（東京農工大学）

「海洋島における固有爬虫類の集団遺伝構造：オガサワラトカゲを例に」* 小関丈一郎（東北大学）、森英章（一般財団法人自然環境研究センター）、牧野渡（東北大学）、牧雅之（東北大学）、占部城太郎（東北大学）、戸田光彦（一般財団法人自然環境研究センター）、千葉聡（東北大学）

「野生絶滅種コシガヤホシクサにおける保全管理方法の確立に向けた繁殖生態学的研究」* 堀内勇寿（筑波大学・生命環境）、田中法生（国立科博・筑波実験植物園）、永田翔（NPO 法人・アクアキャンプ）、上條隆志（筑波大学・生命環境）、鈴木康平（名古屋大・院・環境）

【優秀賞】

「シードバンクを活かした自然再生と市民参加」* 白土智子（東邦大学・理）、林紀男（千葉県立中央博物館）、内山香（東京都西部公園緑地事務所）、西廣淳（東邦大学・理）

「自然環境と満足度～都市の生活と生態系サービス～」* 青島一平（神戸大学人間発達環境学研究科）、内田圭（東京大学総合文化研究科）、丑丸敦史（神戸大学人間発達環境学研究科）、佐藤真行（神戸大学人間発達環境学研究科）

<動物繁殖・生活史>

【最優秀賞】

「繁殖海域を共有する海鳥は餌資源を分け合っているのか？—糞のDNAから探る採食戦略—」* 小村健人（京大院・農）、安藤温子（国環研）、堀越和夫（NPO 法人小笠原自然文化研究所）、鈴木創（NPO 法人小笠原自然文化研究所）、井鷲裕司（京大院・農）

「無脊椎動物における捕食リスクに応じた産子調節」* 稲田美和（奈良女・院）、遊佐陽一（奈良女）、和田葉子（奈良女）

【優秀賞】

「森と川の季節的なつながりがアマゴの生活史を多様にする？：混合分布モデルによるアプローチ」* 宇梶伸（神戸大院・理）、上田るい（神戸大・理）、金岩稔（三重大院・

生資)、瀧本岳(東大院・農)、佐藤拓哉(神戸大院・理)
「オオミズナギドリをつがい外父性に非繁殖期の活動時間配分は影響するか：DNA分析とバイオロギングからのアプローチ」*坂尾美帆(東京大学大気海洋研究所)、武島弘彦(総合地球環境学研究所)、高橋晃周(国立極地研究所)、佐藤克文(東京大学大気海洋研究所)

<動物群集>

【最優秀賞】

「セルロース分解能をもつカニ類が駆動するマングローブ域の食物連鎖」*川井田俊(東京大学大学院農学生命科学研究科)、河野裕美(東海大学沖縄地域研究センター)、佐野光彦(東京大学大学院農学生命科学研究科)

【優秀賞】

「捕食者が増えると捕食効率が高まる？：捕食-被食関係の密度依存性に関する新規プロセスの検証」*松尾寛(神戸大院・理)、立木佑弥(京大・ウィルス研)、岸田治(北大・FSC)、佐藤拓哉(神戸大院・理)

「冷温帯落葉広葉樹林における樹種間の鱗翅目群集集合決定要因」*阿部智和(東京大学大学院農学生命科学研究科)、Kumar Rajesh(Central Muga Eri Research & Training Institute)、Volf Martin(Czech Academy of Sciences)、Libra Matrin(Czech Academy of Sciences)、阿部永(千葉大学大学院理学研究科)、福島宏晟(千葉大学大学院理学研究科)、向後良亮(千葉大学大学院理学研究科)、Novotny Vojtech(Czech Academy of Sciences)、村上正志(千葉大学大学院理学研究科)、鎌田直人(東京大学大学院農学生命科学研究科付属演習林北海道演習林)

<群落・遷移・更新>

【最優秀賞】

「菌類による材分解がコケを介してトウヒ実生の倒木更新に与える間接効果」*安藤洋子(東北大学)、深澤遊(東北大学)、大石善隆(福井県立大学)、Song Zewei(University of Minnesota)

【優秀賞】

「Can intraspecific variability of resprouting be explained by the seasonal nutrient allocation in dwarfing alder *Alnus japonica*?」*見原悠美(北大・環境科学院)、矢部和夫(札幌市大・デザイン)、植村滋(北大・FSC)

<物質循環>

【最優秀賞】

「亜熱帯マングローブ林における粗大有機物の分解速度と環境要因の関係」*中野凌佑(神戸大・農学)、南埜幸也(神戸大・農学)、田邊舞(神戸大・院・農学)、大塚俊之(岐阜大・流圏セ)、藤嶽暢英(神戸大・院・農学)、友常満利(神戸大・院・農学)

【優秀賞】

「蛇紋岩土壌における生葉の分解」*佐藤開(京大院・農)、梶野浩史(京大院・農)、河合清定(京大院・農)、斎藤悠(京大院・農)、中井渉(京大院・農)、中村亮介(京大院・農)、岡田直紀(京大院・農)

「半乾燥地の森林土壌における真菌・原核生物機能群組成と窒素動態」*岩岡史恵(京大院・農)、谷口武士

(鳥取大・乾燥地研)、山中典和(鳥取大・乾燥地研)、杜盛(中国科学院・水土保持研)、館野隆之輔(京都大・フィールド研)

「高カルシウム条件に対するミミズの局所適応：その検証と窒素循環における重要性」*河上智也(北大・院・環境)、磯田玲華(北大・院・農)、橋床泰之(北大・院・農)、小林真(北大・FSC)

<行動>

【最優秀賞】

「チョウセンカマキリに対するハリガネムシの寄生コストと形態改変」*黒田剛広(神戸大・人間発達環境)、高見泰興(神戸大・人間発達環境)

【優秀賞】

「なぜカワウとアオサギは同居できるのか？」*本多里奈(弘前大学)、東信行(弘前大学)

「コウモリの最適採餌戦略の検討～マイクロホンアレイを用いた3次元音響動態計測～」*濱井郁弥(同志社大学)、本居和也(同志社大学)、藤岡慧明(同志社大学)、福井大(東京大学)、飛龍志津子(同志社大学)

「捕食者から逃げるバッター～コバネイナゴは飛翔で逃げる場合と跳躍で逃げる場合がある」*久我立(九州大学)、粕谷英一(九州大学)

「冬のターマイトボール：シロアリ卵擬態菌の越冬の謎を解く」*有藤惇(京大院・農)、矢代敏久(京大院・農)、松浦健二(京大院・農)

<生態系管理>

【最優秀賞】

「過採食による下層植生衰退下でシカは何を食べているのか？-DNAバーコーディングで明らかとなった高木種への依存性-」*古田智博(京大院・農)、中直之(京大院・農)、鈴木節子(森林総合研究所)、高柳敦(京大院・農)、井鷲裕司(京大院・農)

【優秀賞】

「ミャンマー農山村で高頻度に利用されるタケ(*Bambusa polymorpha*と*Cephalostachyum pergracile*)の個体群動態と持続可能性」*上田健太(広島大学総合科学)、山田俊宏(広島大学総合科学)、奥田敏統(広島大学総合科学)、Ei EiFlaing(ミャンマー森林研究所)

「食物網・送粉ネットワークの構造の中規模攪乱仮説—土地利用の変化がネットワークの構造に与える影響」*篠原直登(東京大学・農)、内田圭(東京大学・総合文化)、吉田丈人(東京大学・総合文化)

「東北地方での山菜の潜在的な供給と利用の地理的パターン」*佐々木春佳(東北大・院・生命)、饗庭正寛(東北大・院・生命)、小黒芳生(森林総研)、中静透(東北大・院・生命)

<植物個体群・繁殖・生活史>

【最優秀賞】

「サラシナショウマ種内3送粉型における標高傾度に沿った繁殖様式の分化」*田路翼(信州大・理)、市野隆雄(信州大・理)

【優秀賞】

「放棄竹林拡大に及ぼす侵入地の光環境の重要性」*小林慧人(京大・農・森林生態)、北山兼弘(京大・農・

森林生態)、小野田雄介(京大・農・森林生態)

「異なる緯度に生育するヒメガマの種子発芽速度の変異とその適応的意義」*倉園知広(神戸大院・理・生物)、角野康郎(神戸大院・理・生物)

<外来種>

【最優秀賞】

「外来種の迅速な進化：キタアメリカフジツボ幼生の定着高度の時間変化」*大平昌史(北大院環境)、野田隆史(北大地球環境)

【優秀賞】

「小笠原諸島母島列島におけるグリーンアノールの生息適地と在来トカゲの分布」*上田亜衣(横浜国立大学大学院環境情報学府)、小池文人(横浜国立大学大学院環境情報学府)

「シデコブシとコブシの種間交雑がシデコブシの存続に及ぼす影響」*行年恭兵(名古屋大学大学院生命農学研究科)、玉木一郎(岐阜県岐阜県立森林文化アカデミー)、鈴木節子(森林総合研究所)、石田清(弘前大学農学生命科学部)、戸丸信弘(名古屋大学大学院生命農学研究科)

<植物生理生態>

【最優秀賞】

「ナラ枯れ罹患木の生残機構 一生残木と枯死木の樹液流特性比較」*山本遼平(京大院・地球環境)、檀浦正子(京大院・地球環境)、小南裕志(森林総研関西)、衣浦晴生(森林総研関西)、吉村謙一(京大院・農)

「*Juniperus sabina*における異なる乾燥強度下での水輸送：仮道管の空洞化と壁孔の通水抵抗の影響」*佐藤佳奈子(岡山大・院・環境生命)、三木直子(岡山大・院・環境生命)、小笠真由美(森林総合研究所)、栗飯原友(岡山大・院・環境生命)、矢崎健一(森林総合研究所)、楊靈麗(岡山大・院・環境生命)、松尾奈緒子(三重大・院・生物資源)

【優秀賞】

「ウラジロエノキ稚樹の乾燥枯死の生理メカニズム」*甲野裕理(京大生態研)、才木真太郎(京大生態研)、木村美久(日大生物資源)、丸山温(日大生物資源)、吉村謙一(京大農)、檀浦正子(京大地球環境)、矢崎健一(森林総研)、相川真一(首都大)、石田厚(京大生態研)

「データ同化が明らかにする、日本広域における展葉・落葉フェノロジーと気温の詳細な関係」*池田成貴(京大・農)、渡部俊太郎(京大・フィールド研)、伊勢武史(京大・フィールド研)

「葉内のCO₂不足に誘導される光合成能力の上昇～ポリアミンによる光合成促進の寄与～」*松山泰(北里大学海洋生命科学研究所)、坂田剛(北里大学一般教育部)、安元剛(北里大学海洋生命科学研究所)、神保充(北里大学海洋生命科学研究所)、渡部終五(北里大学海洋生命科学研究所)、河田凜(北里大学海洋生命科学研究所)、吉村謙一(京都大学農学部)、才木真太郎(京大生態学研究センター)、関川清広(玉川大学農学部)、中野隆志(山梨県富士山科学研究所)、石田厚(京大生態学研究センター)

高校生ポスター賞受賞者

【最優秀賞】

「適応する卵：シロアリの卵の種間比較からみる卵の防衛戦略の進化」谷野彩奈(大阪府立三国丘高等学校、京都大学 ELCAS)、北田大志(大阪星光学院高等学校、京都大学 ELCAS)、前田崇彰(京都大学大学院農学研究科、京都大学 ELCAS)、藤田忠英(京都大学大学院農学研究科、京都大学 ELCAS)、松浦健二(京都大学大学院農学研究科、京都大学 ELCAS)

「ガマやショウブに集まるアブラムシの正体とその行動に迫る」井川恭平、上野裕之(佼成学園高等学校)

「浮き葉形成によるデンジソウの生存戦略」浅野菜乃佳、木山宙香(ノートルダム清心学園清心女子高等学校)

「変形菌の「自他」の研究 変形体の自己拡張的自他認識力」増井真那(東京都立小石川中等教育学校)

【優秀賞】

「日本産サケ科魚類イワナ *Salvelinus leucomaenis* の背部白色斑紋のサイズと生息環境との関係」中村彰甫、二村啓太、鈴木楓南(成蹊高等学校)

「廃棄物利用はキノコ栽培において有効か？」鳴川紗、竹本莉愛、工藤理子(ノートルダム清心学園清心女子高等学校)

「光の波長がサンゴの成長に与える影響」都築寛源、櫻井博基、渋谷有加(玉川学園高等部)

「ヒダサンショウウオの越冬幼生が現れる原因を探る」三宅遥香、村瀬すぐり、加藤なつき、福田英治(岐阜県山県市立高富中学校)

「ノジスミレは葉を使って水を集める！！」羽鳥隼礼(埼玉県立熊谷西高等学校)

【審査員特別賞】

「ヒカゲスミレの生育条件について」川俣蒼、長谷川龍之介(新潟県立新津高校)

「琵琶湖産魚介類を用いた伝統料理に対する県民の意識調査」西谷咲希、原田大生(滋賀県立守山高校)

「散布体の発根と刺激」坂本空(東京都立科学技術高等学校)

「種差海岸の環境がサクラソウ自生地に及ぼす影響」小笠原舞華、鹿島未夢、岩間暉、嶋守龍、佐々木健也(青森県立名久井農業高等学校)

「森林管理が土壌微生物の分解機能の多様性に及ぼす影響」二宮亜由美(嵯峨野高校)、山本桐也(徳島市立高校)、向井真那(京都大学農学研究科)、辻井悠希(京都大学農学研究科)、横山大稀(京都大学農学研究科)、北山兼弘(京都大学農学研究科)

「孤立林内における2つのため糞場から見たタヌキの食性と行動～練馬区武蔵学園をフィールドとした調査～」飯島昌弘(武蔵高等学校)

「イボニシとレイシガイの化学物質汚染による奇形率の比較」伊藤大賀、水野裕介(筑波大学附属駒場高等学校)

「静岡市巴川流域におけるカメ類の生息状況と近隣住民の意識調査について」大塚宗汰、三浦結、松永みなみ、鈴木結菜、遠藤知海、大塚彩友、川島未来、山口小麦(学校法人静岡理工科大学静岡北中学校・高等学校)

「熊谷西高校周辺の二毛作水田におけるヌマガエル

長率」阿部康平、玉村和樹（埼玉県立熊谷西高等学校）
 「東京都武蔵野市小規模混交林内における鳥類相の季節的推移について」鈴木裕太（成蹊高等学校生物部）、佐藤尚衛（成蹊中学高等学校生物学研究室）
 「動物園におけるオランウータンの社会的行動」黒田峻平、川上礼志郎、本田豊（海城中学高等学校）
 「論田川に生息するカワニナの正体に迫る」二村勇輔、中島拓哉、細川城太郎、矢島亮太、仁科正徳、丹羽啓介、長屋実花（岐阜県立岐山高等学校生物部）
 「南日本における港のアリの地域間比較—外来アリのモニタリング」藤田祥帆、佐々木菜緒（池田学園池田高等学校）
 「多摩川水系秋川におけるヒガシマドジョウの模様変異」三内悠吾、三浦健太郎、遠藤岬、山本晃弘、植本創、高瀬晶、田村裕慈、野村智充（海城中学高等学校）
 「知ってる？マングローブ植物の葉のひみつ〜マングローブ植物の葉の調査〜」池ノ上幹太、石川匠、清水郁孝（東京都立科学技術高等学校）
【ナチュラリスト賞】
 「熊谷西高校周辺に生息するアライグマ」小川岳紘、栗原由樹（埼玉県立熊谷西高等学校）
 「桜島溶岩地帯に生きるアリ—遷移にともなうアリ群集の変化」下園桜、田神沙羅（池田学園池田高等学校）
 「土からマングローブを見てみよう」福村龍星、三上詩帆（東京都立科学技術高等学校）
 「川越市周辺の河川に侵入した外来生物カワリヌマエビ属の遺伝的・形態的研究」富田大愛、清水花衣（埼玉県立川越女子高等学校）
 「コケ植物の最適条件を探る」吉澤凌、長尾知哉、井野元龍成、入倉侑哉（新潟県立新津高校）
 「サルスベリの樹勢と空洞率の関係」村津進太郎、青木慧（筑波大学附属駒場高等学校）
 「舗装道路と歩道の間隙や植えやすに形成された雑草群落の研究」猪狩秀弥、伊藤隆晃、永井僚（さいたま市立大宮北高校サイエンス部）
 「ヒドラの行動の研究2」齊藤紗也華（宮城県仙台二華高等学校）
 「多摩川河川敷の上流と下流における植生の比較」中島慎也、池松諒（筑波大学附属駒場高等学校）
 「侍従川の浚渫がハゼ類の産卵に与えた影響と今後の保全について」深沢大地、長崎光則、重田優香、田島駿一、高橋一太、金子英司、平川美央、佐野真吾（ふるさと侍従川に親しむ会）
 「渡良瀬遊水地の自然（2）—土壌微生物の調査—」高橋侑希、町田瑞樹、高山雅貴、野上将大（栃木県立小山高等学校）
 「仙台市沿岸におけるクロマツ実生の菌根の観察」伊藤亜珠希、中川朔実（宮城県仙台第三高等学校）
 「アブラムシ防除における最適条件」東優樹、岡田和大、中陳 遥香（立命館慶祥高等学校）
 「東京都心部における食肉目の分布特性」大塚悠宇馬、伊藤太郎、秋山馨、高野大地、原園真太郎、宮城隆太（海城中学高等学校）
 「越谷北高校周辺の水生生物を探る」本多 金之輔、石川

智就、小林亜沙人、山口広夢、米倉泰地、角田柊（埼玉県立越谷北高等学校）
 「ナミテントウの斑紋の多様性」二川原湧、橋本真論（立命館慶祥高等学校）
 「渡良瀬遊水地の自然(1)—土壌動物の調査—」平塚勇輝、栃木広夢、栗原渉、羽金直人（栃木県立小山高等学校）
 「イタドリが初期遷移において強い理由」坪井由明、三浦純、根本直彦（東京都立国分寺高校）
 「チームアライグマの活動成果〜外来生物問題に対する意識の変化〜」小川岳紘（埼玉県立熊谷西高等学校）、丸兒明日香（埼玉県立越谷北高等学校）、富田大愛（埼玉県立川越女子高等学校）、清水花衣（埼玉県立川越女子高等学校）、中田大登（埼玉県立所沢西高等学校）
 「観音山のニッコウキスゲについて」平川真緒、伊藤彩海、中村紫織（埼玉県立熊谷西高等学校）
 「尾瀬国立公園大清水湿原の復元に向けて」永井愛美、齋藤剛、森山愛恵（群馬県立尾瀬高等学校）
 「武尊山麓およびその周辺地域における地表徘徊性甲虫調査 ～植生を中心とした環境要因と地表徘徊性甲虫相の比較〜」工藤大政、吉澤幹太、星野大樹（群馬県立尾瀬高等学校）
 「アオドウガネの集団行動—モニタリングを用いた武蔵高等学校中学校構内におけるアオドウガネの集団行動の調査—」阿部純大（武蔵高等学校中学校生物部）
 「Satoyama Science - 生物多様性評価とエコツーリズムに向けて—」池田功輝、若山勇太（愛媛県立宇和島東高等学校）
 「サンゴの成長と環境条件の関係」西山愛理、三橋水樹香、南春佳（玉川学園高等部）
 「剪定するとどう樹形は崩れるのか —ケヤキにおけるシュート構造の変化—」遊佐涼介、山内直寛（筑波大学附属駒場高等学校）
 「外的環境が与えるサーカディアンリズムへの影響」中陳遥香、東優樹、岡田和大（立命館慶祥高等学校）
 「光と植物の応答」関口貴子（群馬県立高崎女子高等学校科学研究クラブ）

英語口頭発表賞受賞者

< Animal Behavior >

【Best Award】

"Mutualism between ants and snakes? An ant that shares its nest with the predator of its predator" *Yosuke KOJIMA (Dep. Zool, Kyoto Univ.), Jo RAKOTOARISON (Dep. Anim. Biol., the Univ. of Antananarivo), Teppei JONO (Tropical Biosphere Research Center, Univ. Ryukyus), Takafumi MIZUNO (Center for Bioresource Field Science, Kyoto Inst. Technol.), Akira MORI (Dep. Zool, Kyoto Univ.)

【Excellent Award】

"Parasite infection induces size-dependent host dispersal" * 照井慧（北大）、大上慧太（北大）、卜部浩一（道総研）、中村太士（北大）

< Evolution >

【Best Award】

"Roles of maternal effects in maintaining genetic variation: Maternal storage effect" *Yamamichi Masato, Hosono Masaki (Kyoto Univ.)

【Excellent Award】

"Sexual selection within a species strengthens interspecific reproductive interference" *KYOGOKU Daisuke (Ryukoku Univ.), Sota Teiji (Kyoto Univ.)

< Plant Ecology >

【Best Award】

"Is habitat association of karst tree species related to nonstructural carbohydrates in leaves, stems and roots?" *Nalaka GEEKIYANAGE (Dep. Forest Biomater. Sci., Kyoto Univ., Dep. Plant Sci., Rajarata Univ.), Uromi Goodale (Col. Forestry, Guangxi Univ.), Imena Valdes (Dep. Biol. Sci., Florida Int. Univ.), Kunfang Cao (Col. Forestry, Guangxi Univ.), Kaoru Kitajima (Dep. Forest Biomater. Sci., Kyoto Univ.)

"Determining the sexes of a temperate dioecious shrub species using the difference in soil pollen concentration beneath females and males" *Sugiyama, Anna (Yale Univ.), Shichi, Koji (Forestry and Forest Products Research Institute), Masaki, Takashi (Forestry and Forest Products Research Institute), Hubbell, Stephen (Univ. of California, Los Angeles, Smithsonian Tropical Research Institute)

< Applied Ecology >

【Best Award】

"A novel method of ecosystem management using multiple mobile robots" *Katsuaki Tanaka (早稲田大学大学院, 日本学術振興会特別研究員), Hiroyuki Ishii (早稲田大学理工学術院, ヒューマノイド研究所), Satoshi Okabayashi (文化学園大学), Qing Shi (北京理工大学), Yusuke Sugahara (東京工業大学), Atsuo Takanishi (早稲田大学理工学術院, ヒューマノイド研究所)

【Excellent Award】

"Potential consequence from interaction among coral macroalgae and reef physical structures" *Pak yin CHEUNG (National Taiwan Univ.), Yoko Nozawa (Academic Sinica), Takeshi Miki (National Taiwan Univ., Academic Sinica)

"Establishment of quantitative real-time Polymerase Chain Reaction (qPCR) technique for detection and quantification of entomopathogenic fungi in soil" *Syaiful SARAGIH (The Univ. of Tokyo), Suhei Takemoto (The Univ. of Tokyo), Yoko Hisamoto (The Univ. of Tokyo), Masanori Fujii (The Univ. of Tokyo), Hiroki Sato (Department of Forest Entomology, Forestry and Forest Products Research Institute, Tsukuba, Ibaraki), Naoto Kamata (The Univ. of Tokyo)

< Animal Ecology & Plant-Animal Interaction >

【Best Award】

"Toxic impact of alien prey depends on foraging ecology of native predators" *Kazila, Evangelia, Kishida, Osamu (Hokkaido Univ.)

【Excellent Award】

"Light and nutrient balance, and mass transfer efficiency: a field manipulation experiment with plankton" *Takehiro KAZAMA (Tohoku Univ.), Kotaro Tokita (Tohoku Univ.), Masato Yamamichi (Kyoto Univ.), Xuwang Yin (Dalian Ocean Univ.), Izumi Katano (Nara Woman's Univ.), Hideyuki Doi (Univ. of Hyogo), Takehito Yoshida (Tokyo Univ.), Nelson Hairston (Cornell Univ.), Jotaro Urabe (Tohoku Univ.)

Ⅲ. 業務執行理事の選任について

2017年3月17日に平成29年度第1回理事会が行われ業務執行理事が選任された。

業務執行理事 (任期: 2017年3月~2019年3月)

陀安 一郎 (専務理事)

木庭 啓介 (庶務担当理事)

北村 俊平 (会計担当理事)

伊東 明 (生態誌編集担当理事)

長谷川雅美* (保全誌編集担当理事)

*任期は2018年の総会まで

Ⅳ. 規則の改訂について

2017年2月18日に平成28年度第4回理事会が行われ、以下の規則改定案が承認された。

1. 一般社団法人日本生態学会大会規則 改訂案 (改訂部分のみ抜粋)

(参加費)

第7条 大会参加費と懇親会費は実行委員会が代表理事・企画委員会と協議し、理事会に意見を求めたうえで定める。

(行事)

第8条 大会開催期間中に以下の各号に掲げる行事を実施する。

2. 本法人正会員 (以下、正会員) による学術論文の一般講演 (口頭発表、あるいはポスター発表)

3. シンポジウムをはじめとする研究集会

4. 定時代議員総会 (以下「総会」)

5. 各種専門委員会

6. 本法人が定める各賞の授与式

7. 懇親会

8. その他、理事会が必要と認めたもの

附則

1. この規則は、2018年第65回大会から適用する。

2. 日本生態学会大鳥賞規則 改訂案 (改訂部分のみ抜粋)

第1条 日本生態学会大鳥賞 (以下大鳥賞という) は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

V. 書評依頼図書 (2016年9月～2017年3月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 畑瀬英男 著「フィールドの生物学 22 竜宮城は二つあった ウミガメの回遊行動と生活の多型」(2016) 232pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-02104-9
2. 中田兼介 著「びっくり!おどろき!動物まるごと大図鑑 1. 動物のふしぎなくらし」(2016) 40pp. ミネルヴァ書房 ISBN:978-4-623-07808-0
3. 本川雅治 編「日本のネズミ 多様性と進化」(2016) 246pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060231-0
4. 青木人志 著「日本の動物法第2版」(2016) 282pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063346-8
5. 水田拓 著「フィールドの生物学 23 「幻の鳥」オオトラツグミはキョローンと鳴く」(2016) 220pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-02118-6
6. 嶋田正和・阿部真人 著「Rで学ぶ統計学入門」(2017) 284pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-0859-2
7. Hamlyn G. Jones 著 久米篤・大政謙次監訳「植物と微気象 (第3版)」(2017) 512pp. 森北出版株式会社 ISBN:978-4-627-26113-6
8. 山田文雄 著「ウサギ学 隠れることと逃げることの生物学」(2017) 270pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060199-3
9. 山田文雄 著「ウサギ学 隠れることと逃げることの生物学」(2017) 270pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060199-3
10. 小見山章 著「マングローブ林 変わりゆく海辺の森の生態系」(2017) 280pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-8140-00883
11. 菊地直樹 著「「ほっとけない」からの自然再生学 コウノトリ野生復帰の現場」(2017) 324pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-8140-0082-1
12. 辻和希 編集「生態学者・伊東嘉昭伝 もっとも基礎的なことがもっとも役に立つ」(2017) 432pp. 株式会社海游舎 ISBN:978-4-905930-10-5
13. 国立歴史民俗博物館 青木隆浩 編「人と植物の文化史」(2017) 182pp. 古今書院 ISBN:978-7722-7143-1
14. 鳥取大学国際乾燥地研究教育機構 監修 小玉芳敬・永松大・高田健一 編「鳥取砂丘学」(2017) 110pp. 古今書院 ISBN:978-4-7722-5296-6
15. 安田善憲 著「森の日本文明史」(2017) 400pp. 古今書院 ISBN:978-4-7722-8117-1

VI. 寄贈図書

1. 「うみうし通信 No.93」(2016) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
2. 「海洋地質図 No.88 見島沖改訂地質図」(2016) CD 産業技術総合研究所 地質調査総合センター

3. 「草と緑 Voi.8」(2016) 88pp. 特定非営利活動法人緑地雑草科学研究所
4. 「第32回 国際生物学賞」(2017) 36pp. 国際生物学賞委員会
5. 「うみうし通信 No.94」(2017) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所「北海道爬虫類両棲類研究報告書 VOL.004」(2016) 40pp. 北海道爬虫類両棲類研究会
6. 「下中記念財団創立55周年記念表彰事業論文集」(2017) 112pp. 公益財団法人下中記念財団

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

- (1) 山田養蜂場みつばち研究助成基金 2017年度研究助成
 - ①幅広い視野をもつ研究者による創造的で有用な研究テーマを支援し、科学的な解明を進めることで、予防医学研究をさらに発展させることを目的とする。2017年度は特に、「健康寿命の延伸」を実現するための研究を支援
 - ②予防医学研究助成:新規応募研究 100～200万円、継続発展研究:200～1000万円
特別研究助成:100～500万円
環境・養蜂研究:100万円
 - ③6月17日(火)17時締切
 - ④山田養蜂場みつばち研究助成基金事務局
- (2) 公益財団法人住友財団 2017年度環境研究助成
 - ①一般研究:環境に関する研究(分野は問いません) 課題研究:2017年度募集課題「地域固有の環境問題の理解および解決のための学際研究または国際共同研究」
 - ②総額1億円
一般研究 8,000万円(1件当たり最大 500万円 50件程度)
課題研究 2,000万円(1件当たり最大 1,000万円 2件を予定)
 - ③データ送信の締切:2017年6月8日(木)必着
郵送書類の締切:2017年6月30日(金)必着
 - ④公益財団法人 住友財団
- (3) 第9回(平成29年度)とうきゅう環境財団社会貢献学術賞
 - ①日本の環境分野において学術的かつ社会的に特に顕著な業績を挙げた研究者(個人・共同・団体、外国籍で国内で研究されている方、但し企業は除きます)
 - ②賞状および賞金 100万円
 - ③平成29年8月31日
 - ④日本生態学会事務局(学会推薦が必要です)

書評

ロバート・A・アスキズ 著 黒沢令子 訳 (2016) 「落葉樹林の進化史—恐竜時代から続く生態系の物語—」 築地書館 370pp. ISBN978-4-8067-1528-3 定価 2,700円 (税別)

本書は、森林、特に落葉樹林に光を当て、その歴史から現状、保全について、北米、ヨーロッパ、日本を対象にまとめた大作である。原作タイトルは *Saving the world's deciduous forests: ecological perspectives from East Asia, North America, and Europe* で、Yale University Press から 2014 年に出版されている。著者 (アスキズ氏) は北米東部で森林の分断化が鳥類の多様性に及ぼす影響を先駆的に調査し (Askins et al. 1987)、その後、遷移の初期段階に依存した鳥類の保全の重要性を指摘したことで知られる (Askins 2001)。本書を読み進めるにつれて、北米東部で著者がこうした研究を行なった背景が窺い知れる。また、本書は樹木やシカなど、章によってさまざまな主役が登場し、その視野の広さを感じる。

第一章は京都から始まる。日本と北米という遠く離れた落葉樹林、特に樹木の類似性に著者は気づく。その原因を落葉樹林の起源に求めることで、第二章は始まる。恐竜が闊歩した時代から哺乳類の時代に移り、幾度とない氷河期を経る。落葉樹林は移動しながら再編成を繰り返した。

第三章は最終氷期後の落葉樹林の変遷で、人間の役割が重要になってくる。野焼きは世界的に重要な森林の攪乱で、疎林や空き地の維持に貢献しただろう。その後、特に中国とヨーロッパで先行的に落葉樹林は農地に姿を変えた。日本や北米でも紀元前 1000 年以後は森林伐採が進んだ。例えばミシシッピ文化は森林を著しく分断し、「ヨーロッパ人が入植する以前は原生林に覆われていたという北米のイメージは空想に過ぎない」と指摘している。

西暦 1600 年以降になると、ヨーロッパでは林学が発展し、日本では森林の再生が熱心に行なわれていた (第四章)。一方で北米では、ヨーロッパ移民が「恐るべき勢い」で森林の伐採を続けた。それを可能にした一因は、疫病の蔓延によって先住民の集落が放棄されていたことである。1800 年代になると森林伐採の波は中西部に移り、オハイオ、インディアナ、イリノイ州の肥沃な農地が見つかる。ニューイングランド地方などの東部の生産性の低い農地は放棄され、森林が劇的に再生した。北米北東部で生じた最近 100 年間での森林再生過程の記述は圧巻である。

第五章では、原生林が「稀な大規模攪乱」で破壊され、再生される過程が記される。しかし著者は攪乱後の遷移初期段階に特化した生物にも目を留める。上述したように、北米北東部では森林の遷移が一気に進み、ワタオウサギをはじめとした遷移初期種が激減した。野火や河川の攪乱が抑制された状況下で、放棄農地や皆伐地、送電線沿いの草地などの重要性が説かれている。

第六章は、1953 年から行なわれているコネチカット・カレッジ植物園での鳥類のモニタリング調査から始まる。これにより、森林性鳥類が予想に反して減少していることが明らかになる。その後、同様の現象が北米東部で共通してみられた。越冬地の環境悪化や繁殖地での餌動物の欠乏、巣の捕食者や托卵者など、さまざまな原因の検討が自身の研究を含めてなされている。1990 年代以降、北米でなされた一連の研究を私は論文を通して目にしてきた。研究を自身で進めていた著者による総括は非常に興味深い。後半では、日本やヨーロッパとの対比もなされている。

第七章はシカの章である。シカの増加による樹木の更新阻害について、北米、ヨーロッパ、日本の事例が整理されている。著者は特にシカの捕食者であるオオカミの人間による根絶の影響に注目しており、北米のオオカミ再移入の結果などについて議論している (章のタイトルは「オオカミが消えた森の衰退」である)。北米各地で行なわれているシカの防除柵を用いた実験が詳細に記載されている。

第八章と第九章は気候変動と外来種を扱っている。特に、アジア由来と考えられる病原菌によって壊滅的な打撃を受けたクリとニレの話が取り上げられているのがよかった。また、昆虫ではキクイムシやカサアブラムシが扱われている。

最終章では、なぜアメリカで原生的な自然を重んじる保護活動が展開されたのかが説明されている。それは、フロンティアに残る原生的な自然の保護の重要性が著名な知識人によって啓蒙されたからだという。ヨーロッパの文化的な景観に代わるものとして原生的な自然は重んじられ、アメリカ人はそれを国のシンボルとしてとらえるようになった。農業に関連付けられたヨーロッパの自然保護は対照的なものとして扱われている。著者はそれぞれの保護 (保全) 手法には一長一短があるとし、融合の重要性を説く。

通してみると、アメリカにおける森林の再生、分断化の研究、シカの増加、自然保護の展開などが私にとっては特に興味深かった。しかし、読者によって関心は異なるであろうし、多岐にわたるテーマを扱っているのも、森林の生物の生態や保全に関心を持っている人には、広く興味を持っていただけたらと思う。本書は 370 ページにわたるが、各章単独で意味が通じるようになっている。各自で興味のある章を読むだけでも、著者の意図や内容を十分理解することができるだろう。

引用文献

- Askins RA (2001) Sustaining biological diversity in early successional communities: the challenge of managing unpopular habitats. *Wildl Soc Bull*, 29:407-412
- Askins RA, Philbrick MJ, Sugeno DS (1987) Relationship between the regional abundance of forest and the composition of forest bird communities. *Biol Conserv*, 39:129-152

(森林総合研究所 山浦悠一)

丹下健・小池孝良 編 (2016)「造林学 第四版」朝倉書店 192pp. ISBN:978-4-254-47051-2 定価 3,400 円 (税別)

森林を研究する生態学者には農学部出身者と理学部出身者がいる。ほとんど同じような研究をしている、一方は自分を森林生態学者と呼び、他方は自分を植物生態学者と呼ぶ。学生・大学院生の時の教科書を比べてみると同じようなものを読んでいるのに。評者の勤務先の図書館や生協では、森林生態学の教科書は農学の棚にあり、植物生態学の教科書は理学の棚にある。評者が学生の時には両方読んだが、同じ棚にならなでいたか思い出せない。ただし、造林学の教科書となると、農学部出身者なら読んでいるのが普通だろうが、理学部出身者はそうでもないのではないだろうか。そういう評者は理学部出身で、実は学生の時に（というか今に至るまで）造林学の教科書を真面目に読んだことはなかったのである。そこで本書を読んでみた。

読んでみると驚いたことに、植物生態学では古典的な生産構造図 (Monsi & Saeki 1953)、樹形のパイプモデル (Shinozaki et al. 1964)、自然間引きの $3/2$ 乗則 (Yoda et al. 1963) などが図解付きで出てくる。生産構造図における葉量の垂直分布を上から積算したものがパイプモデルの積算葉量に対応することも説明されている。本書の旧版『造林学三訂版』(1986、朝倉書店)を図書館で借りて見てみると、本書の執筆者は完全に入れ代わっていて、まったく別のものである。『三訂版』でも評者の手元にある『造林学』(1994、文永堂出版)でも、人工林の間伐に用いられる密度管理図の基礎となる $3/2$ 乗則は出てくるが、生産構造図とパイプモデルは見当たらない。この 20~30 年間の間に植物生態学と造林学が融合してきたことが察せられる。基礎 (理学) あっての応用 (農学や林学) なので、これはよろこばしいことであろう。それよりずいぶん前の話だが、京都大学農学部で四出井綱英が造林学研究室を森林生態学研究室という名前に変えたのは、そのような考えからだったという (『自然保護・森林・森林生態』、1974、農林出版)。

一方で、基礎を扱うはずの最近の植物生態学の教科書はどうであろうか。比較的新しい大部の教科書『植物生態学』(甲山隆司著者代表、2004、朝倉書店)を見てみると、自己 (= 自然) 間引きの $3/2$ 乗則については、傾きが $4/3$ になるという最近の議論を含めて図付きの解説があるが、生産構造図は索引に見当たらず、パイプモデルについては図はなく簡単な説明が載っているだけである。この「朝倉本」では生産構造図もパイプモデルも基本すぎて、スペースの都合上割愛せざるをえなかったのだろうか。生理生態学を中心とする寺島一郎著『植物の生態』(2013、裳華房、通称「寺島本」)では、 $3/2$ 乗則、生産構造図、パイプモデルのいずれも索引に出ていない (ただし、生産構造図は葉群の光吸収についての節で、パイプモデルについては樹木の成長解析についての節で短く説明されている)。大原雅著『植物生態学』(2015、海遊舎)ではパイプモデルは出てこないが、 $3/2$ 乗則と生産構造図は図付きで説明されている。ただし、「大原本」

は草本の個体群生態学が中心で、群落 (= 植物群集) レベルの現象の解説はやや浮いている感じが否めない。

してみると、群落レベルの植物生態学の古典的理論を踏まえた体系的解説としては、最近の植物生態学の教科書よりも、むしろ本書の方が優れているといえるかもしれない。本書の前半には樹木の生理的メカニズムにまで踏み込んだ解説 (材形成、芽の性質と成長など) が随所にあり、後半の 3 章 (森林の更新方法、木材生産のための造林技術、熱帯荒廃地と環境造林) では、造林学ならではのテーマが取り上げられている。これらは植物生態学の教科書にはまず出てこないテーマであり、評者のような理学部出身の森林研究者には特に有用であろう。巻末には、短いコメント付きの参考文献リストがあり、さらに進んで勉強するのに便利である。「公務員試験対策本」「造園職試験に必須」といったコメントは実学ならではの。

(鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎)

Marc Kéry・Michael Schaub 著・飯島勇人・伊東宏樹・深谷肇一・正木隆 訳 (2016)「BUGS で学ぶ階層モデリング入門」共立出版 660pp. ISBN:978-4-320-05780-7 定価 7800 円

最初にお断りすると、いささか小学生が書きそうな感想文のようなものになることを、ご容赦いただきたい。評者自身のように、ある時期に「新しい」統計学手法が生態学でもよく使われるようになったのに、勉強が追いつかなくなった還暦前後の研究者や、「自信ありげ」に統計を指導してくれる先輩や教員などにお尋ねしないと、生態学で最先端 (流行り) の統計分析結果や自分のとったデータの価値に自信がもてない「若手」研究者むけの内容になると思う。統計学の原著論文を読みこなしおられる方には、そもそもこの書評も和訳書も不要だろう。少なくとも原書が、安くて天然色で軽い分、良い。あと、以下、ほとんどの文末には「、と私は思う。」という句がつくのだが、煩雑なのですべて省く。補足して読んでいただきたい。

さて、我々がまだ頭の柔らかいときに習い、慣れ親しんでいた頻度主義統計分析は、今も価値はあるが、使える場面は限られている。東北大地震のような稀で大きな攪乱を目の当たりにし、福島第一原発事故のような低頻度の大きな攪乱の現場に通って、定常的な動態から予測される法則や規則、つまり観察される期待値の高い、短時間に繰り返しの多い自然現象ではない生物についての現実、事実を、証拠としてどう科学的に記述するのか。観ないですませるにはもったいないが、観たことを記述するのに、どうも、頻度主義統計学だけでは説得力不足という印象はなおさら強くなった。少なくとも、社会の需要を満たし、科学者の？信頼を回復できそうにはない。

日本の生態学の現場でも、21 世紀を迎える前後に GLM や尤度主義のモデル比較、ついでベイズ統計学が普及してきたときに、私としては勉強を怠ったつもりはなく、多くの類書を求めて、読んだ。しかし、要領が悪く、どうも納得がいかないし、うまく使えない。頻度主

義統計であれば、誤用も自分でそれなりに判断できるし、前提が単純であるから適否もわかりやすい。それで、ずっと疑念を順序だてて説明できる力のなかった生態学における AIC の使い方の問題点については、粕谷さんの解説を京都でのゼミでうかがい、やっと合点がいった。その内容は、日本生態学会誌 65 の記事に要約されている。そもそも、赤池さんが理論を応用した工学的情報の指数値は、生態学で出てくる数字とは何桁もちがっていて、それをみれば、そもそも情報「量」なんだから、生態学での使い方はちがうんじゃないかと思うのが素直だろう。私は、現場の生態学者なので、自分で見てきた自然についてのあてはめが、直感的にどうも合点がいかないことが多かった。なぜ合点がいかないのかが、ベイズ統計については、その本質を理路整然と理解できず、残念ながら説明できなかった。

それが、日本語に翻訳していただいた本書を読んで、かなりすっきりした。原著で読んで理解していれば、もう少し早くすっきりできていたことになる。残念ながらその機会は逸した。メーリングリスト・ジェコネットでは本書の出版予告を見て、いつものようにピンときたので速攻でネット割引で注文した。ざっと目を通して、大正解と、書評に手をあげることにした時は、この本があれば私にも「できる」と勇んでしまった。相変わらず、軽はずみだったかもしれないが、楽観的になれなければ研究者は生き残れないんだよ。目論見がうまくいけば、書評のネタにも最適という皮算用だった。引き受けてから書評を書く期限の1年以内には、その目論見は淡くも崩れ去っている。まだ諦めていないが、周回遅れのルートルが使いこなすにはもう少々時間がかかることも現実であった。つまり自分のデータにあてはめて、論文を受理までもって行って具体的に納得できるところまで行くには、硬くなった頭をほぐす時間が足りなかった。本書の内容を本当に自分のものにできるよう、これから老後の楽しみとする。

本書は、「はじめに」からして、他のハウツー統計解説書とは違って秀逸である。言い換えれば、ファイ(why)をしっかり書いてある。生態学のデータ(観測値)とはどういうものか、事実と観測値は当然ながら違うもの。観測した時点、記述した時点で、数式になっていなくてもそれはモデルだよ、など、いちいち、うまく説明していて言葉も巧みで、感心する。哺乳類科学誌に浅田さんの書評が出た。具体的な内容(章立て)の要約も紹介されているので、できればそちらもごらんあれ。で、現場の場数をふまれているその浅田さんであっても、近年の日本ではニホンジカのデータや議論は充実しているにもかかわらず、迷える子羊だったらしい。野生生物の絶対個体数があるとか、その個体数が観測できるはず、あるいは近づけるはず、という妄想をいだいてしまう素朴(naive)な研究者や科学者にとっても、ここの説明(図1.2など)は、優しい導きになっている。不安になる都度、読み返す価値があるだろう。また、本書の構成と各章の内容を整理した表1-2は、データの性質(類別、順位、比例変数など)と比較データの対応関係やグループ数などを対比して、それぞれに適応した頻度主義統計学

の分析手法を一覧表でしめしてくれて、私の最初の手引きをしていただいた石居さんの生物統計学入門と似た方法で、本書で頭が整理できそうと予感した。

第2章のベイズ統計の説明(例えば p.34, L5-17)は、明快で、今まで考えていたことをすっきり記述してある。似たような説明はどの本にもあるが、似て非なるものだ。著者らが講義などで繰り返し説明して、学生に理解してもらうための整理の仕方を実直に工夫した努力の成果だろうと推測する。ベイズ統計は、統計学の専門家、数学の専門家は生態学者よりも何十年か先にその利点に気づき、理論と分析技術を発展させてきた。生態学者も使いこなせるようになったのは、計算機科学の道具(CPUとソフトウェア)の進歩と普及のおかげというわけだ。生態学のほかの進歩というか変化も、そういうことに負うところは大きい。科学と科学技術“Art”の進歩(変化)は、車の両輪のようなものである。

第3章の一般化線形モデルの概念や応用の一般的な解説、後半は典型的なヘビヤトリなどの事例を使ったRでのプログラミング例から、本題が始まる。各章、構成は同じであるが、ここでも説明の仕方ととりあげてある要素にいちいち感心する。例えば、「驚いたことに“undefined real result”トラップがあったと表示され……止まってしまう、いったい本書をこのまま読み進むべきか」という記述の後に、プログラム(WinBUGS)を上手に動かす「標準化」といった手法を解説している。一見無駄なような迂回した書き方ながら、大きな計算量を扱っている実感を読者に持たせ、使いこなすコツも最初に伝える、上手い工夫だ。p.69 L5の、「経験を積むなかで、……連鎖のグラフも膨大にみることになるので、やがて目も肥えてくる。」といった解説も、読者が後からもなるべく迷わないように導くよい方法だ。蛇足ながら、事例として引き合いに出されているジュラ地方のハヤブサのデータは、40年分である。野生生物の個体群動態について何かを語ろうとするとき、今や最低40年の観測は、生態学の標準となっている。

本書の記述の圧巻は、やはり4章のランダム効果の解説だろう。どの一節にもうなずける説明文があるし、説明のしかた、言葉の巧みさにはいちいち感心した。例えば、4.1.2 ランダム効果とは何か?では、「効果がランダムであると仮定するためにはそれが交換可能でなくてはならないことを意味する。また、これは一種の判断であり検証できるものではない。」と説明する。ここで、私は膝を打った。エリオット・ソーパーが、なぜベイズ主義をうけいれないのか。なぜなんでしょうねえ、と、かの生物統計学の導師の一人 MNK さんも首をかしげておられたが、検証可能性を金科玉条とする科学哲学者にあっては、「検証できないものを、判断するわけにはいかない」のは当然なのだ。それも郁子なるかな。

以下、5章、状態空間モデル、移出入のない閉鎖系の再捕獲(再観測も含む)データから、移出、移入もある系、と階層性をあげた個体群構成、最後はメタ個体群を扱ったベイズ解析手法とプログラミング例を解説している。順を追うごとにページ数も原則増し、最初の分析もまだ実践できていない評者には、「お話し」として読む

にとどまってしまうのだが、原理と説明の段取りが最初に明示されているので、書いてあるとおりに合理的に分析でだろう、あるいは分析してよいだろうことには納得がいく。ただし、「はじめに」で、ある意味では違うだろうと評者が考えたこと、つまり階層が上がれば一見異なる原理が働く、あるいは異なる仮説の当てはまりがよい、創発はあるだろうということはある。WinBUGSでデータを扱う技法は同様だろうが、何を観察するか、あるいは何を観察できたか「判断」するか、その時代、時点でそれぞれの階層に最適で、観察者、研究者の「力量」、およびデータそのものの質と「力量」が問われるはずである。これは、私の直感だけれども、そうだろうと信じる。そのことは、別の観点、観測プロセスの重要性として、最後(14.2)に述べられている。この最終章は、本書の中では必ずしも歯切れがよくない。著者としては歯切れよく書こうとしているが、頻度主義をとるか、尤度主義なのか、ベイズ主義なのか、それぞれの中にも異なる流儀はあり、論争は続く。結局は適材適所で、でもケリーさんとしてはやっぱりベイズが便利、となる。一方で、現在は、深層機械学習(DML)の研究や人工知能(AI)への応用が急激に発展(あるいは展開)していて、次に何が起るかは、予測不能だ。何かが起こって、いろいろなものごとがでてきて、今は思いもよらない計算、統計手法も受け入れられるようになっていくのだろうが、いつ、どれが、どのようにかは誰も知らない。わかっているのは、変わる(進化する)ということだけだ。

とはいえ、生態学の今、生態学のための統計学の今を導いてくれる案内書として、本書はもっとも便利で優れた、日本語でも読める書物になっているに違いない。必要な情報なら、お金を出して本を買わなくても、ウェブに多数の古典が公開され、Rであれ、ベイズ統計であれ、WinBUGSであれ、なんでもTipsが公開されている。ただ、ほとんどの生態学者、学生にとっては、私と同様、この情報の洪水に翻弄される小舟を目的の岸につけるため、本書のような良き海図が必須である。

本書を手にした直後の日本森林学会大会で、私の口頭発表の一つ前が、本書の翻訳者のひとりである正木さんだった。小川試験地の30年余りの樹木データを本書の内容どおりに分析して、かの地の極相林はブナではなくカエデの森かもしれないけれど、はっきりしたことはわからないという。その結論に、私の直感も同意した。それなので、夏に30年ぶりに浅草岳の麓の森林を訪れて、再確認してみた。若いころに見たと思っていた森林とは、少し違う森林だったし、あそこも妨害極相でないわけではないので、さもありなんとも言える。それにしても、低い、落ち着いた声で、ゆっくりと話す正木さんのたた

ずまいは、ベイズさんもあんなふうには説教していただろうな、というような妙な妄想を私にいだかせた。肖像、似ているみたい。

いちおうお断りしておく、書評に手をあげたら学会事務局から本書を余分に1冊いただいた。それは長年お世話になっている環境省奄美野生生物保護センターに寄贈した。奄美大島では、侵略的外来種マングースの防除がすすみ、森林も回復したので、固有のケナガネズミやイシカワガエルなども分布と個体数を回復している。本書で具体例を紹介しているような野生動物の個体群解析には、未開拓の研究により材料がたくさんそろっている、若者の奄美群島への参画を望む。若者よ、WinBUGSを携えて、野に出よう。あと、原書もいっしょにたずさえておくことも、おすすめする。翻訳は日本語として読みやすく、気も効いている。大概わかるが、細かい表現でとまどうこともある。原書と読みくらべれば、たいていすぐに解決するはずである。原書では読み通せないけれど、原書の雰囲気できより正確に著者らの意図を消化したいときには、やはり両方あったほうが理解はしやすく、深めやすいし、termを正確に読めれば、web情報なども広く検索しやすくなる。安い出費だろう。それに、フォーブス誌によれば、生物統計学者はもっとも収入の伸びている職業らしい。若者はこれを制覇して使いこなせるようになっておけば、路頭に迷う心配も少なく、やりたい生態学研究も発展しやすいかもしれない。Good Luck.

(自由科学者 元・東京大学 石田健)

【参考文献】

- ・『赤池情報量規準 AIC—モデリング・予測・知識発見』赤池弘次・甘利俊一・北川源四郎・樺島祥介・下平英寿
- ・哺乳類科学 56(2):287-288 浅田正彦
- ・『生物統計学入門』石居進
- ・日本生態学会誌 65:179-185 粕屋英一
- ・『科学と証拠』エリオット・ソーバー

【URL】

- ・<http://www.datasciencecentral.com/profiles/blogs/27-free-data-mining-books>
- ・<http://www.datasciencecentral.com/profiles/blogs/book-python-data-science-handbook>
- ・<http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/R/>
- ・<https://wirelesswire.jp/2017/03/59340/>
- ・<http://www2.forbes.com/leadership/the-10-best-and-worst-masters-degrees-for-jobs-right-now/>

・公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞、研究助成、共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。
詳細については、学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

名称又は種類	授賞又は助成団体	2016年締切 (*印:2017年締切)
研究・活動助成	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/invite	1月15日*
自然科学研究助成	公益財団法人 三菱財団 http://www.mitsubishi-zaidan.jp	2月7日*
研究援助	公益財団法人 山田科学振興財団 http://www.yamadazaidan.jp	2月24日*
環境問題研究助成	公益財団法人 ニッセイ財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp	4月3日*
学術振興会賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/	4月12日*
国際生物学賞	日本学術振興会国際生物学賞委員会 http://www.jsps.go.jp/j-biol/index.html	4月21日*
研究助成	公益信託 四方記念地球環境保全研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp	5月8日*
環境研究奨励賞	公益信託 エスペック地球環境・技術基金 https://www.espec.co.jp/csr/fund/	5月31日*
育志賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html	6月9日*
基礎科学研究助成・環境研究助成	公益財団法人 住友財団 http://www.sumitomo.or.jp/	6月30日*
プロ・ナトゥーラ・ファンド助成	公益財団法人 自然保護助成基金 http://www.pronaturajapan.com/foundation/pronaturafund	7月15日
文部科学大臣表彰科学賞	文部科学省研究振興局 http://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/index.htm	7月27日
若手科学者賞	文部科学省研究振興局 http://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/index.htm	7月27日
海のフロンティアを拓く岡村健二賞	テクノオーシャンネットワーク http://www.techno-ocean.com/public_html/to/10/okamura-prize.html	8月1日
朝日賞	財団法人 朝日新聞文化財団	8月25日
社会貢献学術賞	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/	8月31日*
助成事業	公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会 http://www.expo-cosmos.or.jp/	9月16日
記念基金助成	公益財団法人 関西・大阪21世紀協会 http://www.osaka21.or.jp/jecfund/	9月30日
沖縄研究奨励賞	公益財団法人 沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/	9月30日
木原記念財団学術賞	公益財団法人 木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.kihara.or.jp	9月30日
科学技術賞	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日*
研究助成	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日*
研究助成	公益財団法人 鹿島学術振興財団 http://www.kajima-f.or.jp/	11月10日
研究助成	公益財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/	12月12日
藤原賞	公益財団法人 藤原科学財団 http://www.fujizai.or.jp	12月20日

一般社団法人日本生態学会
役員・代議員・委員一覧

代表理事 (会長) 可知 直毅 2016.3 ~ 2018.3
業務執行理事
(副会長・次期会長候補)
占部城太郎 2016.3 ~ 2018.3
(専務理事) 陀安 一郎 2017.3 ~ 2019.3
(庶務担当) 木庭 啓介 2017.3 ~ 2019.3
(会計担当) 北村 俊平 2017.3 ~ 2019.3
(ER 編集担当) 久米 篤 2016.3 ~ 2018.3
(生態誌編集担当) 伊東 明 2017.3 ~ 2019.3
(保全誌編集担当) 長谷川雅美 2017.3 ~ 2018.3

理事 (2016.3 ~ 2018.3)

大澤 剛士 川北 篤
近藤 倫生 佐竹 暁子
鈴木まほろ 辻 和希
日浦 勉 別宮有紀子
宮下 直 湯本 貴和
吉田 丈人 吉田 正人

監事

竹中 明夫 2016.3 ~ 2018.3
岡部貴美子 2017.3 ~ 2018.3

代議員 (2015.12 ~ 2017.12)

全国代議員 相場慎一郎 井鷲 裕司
占部城太郎 河田 雅圭
工藤 岳 五箇 公一
近藤 倫生 佐竹 暁子
陶山 佳久 辻 和希
中村 太士 日浦 勉
宮下 直 湯本 貴和
吉田 丈人

地区代議員 森田健太郎 (北海道)

鈴木まほろ (東北)
大澤 剛士 (関東)
浅見崇比呂 (中部)
川北 篤 (近畿)
石川 慎吾 (中国・四国)
久保田康裕 (九州)

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief 久米 篤
Deputy Editor-in-Chief 仲岡 雅裕
Associate Editors
in-Chief 伴 修平 福井 学
半谷 吾郎 井鷲 裕司
石井 弘明 熊谷 朝臣
松浦 健二 三木 健
中村 誠宏 野口 航
小野田雄介 大塚 俊之
陀安 一郎 富松 裕
露崎 史朗 山浦 悠一

Ming Dong
Handling Editors

江成 広斗
濱村奈津子
平田 竜一
兵藤不二夫
角谷 拓
梶 光一
北村 俊平
工藤 岳
牧野 渡
松尾奈緒子
村上 正志
奈良 一秀
長田 典之
佐藤 拓哉
瀧本 岳
横川 太一
Min Cao
Franck Courchamp
Jingyun Fang
Jan Frouz
Rhett D. Harrison
Sun-Kee Hong
Eun-Shik Kim
Mathew A. Leibold
Andrew Lohrer
Zhijun Ma
Ariel Noveplansky
Sergio R. Roiloa
Stephen D. Sebestyen
E. Ashley Steel
Cindy Q. Tang
Ping Xie

Bo Li

福井 大
半場 祐子
日浦 勉
飯島 勇人
鏡味麻衣子
菊沢喜八郎
木庭 啓介
工藤 洋
小林 真
松崎慎一郎
中路 達郎
大橋 瑞江
佐藤 一憲
陶山 佳久
山尾 僚
Stephanie A. Bohlman
Jae Chun Choe
Stuart J Davies
Yunting Fang
Raghavendra Gadagkar
Brenden Holland
David W. Inouye
Kari Klanderud
Simon A. Levin
Jeremy T. Lundholm
Tsewang Namgail
Pil Sun Park
Mark D. Scheuerell
Bo Song
Janne Sundell
Arndt Teleschow
Hoi Sen Yong

日本生態学会誌編集委員会 (2017.1 ~ 2019.12)

編集委員長 伊東 明
編集幹事 安房田智司 永光 輝義
名波 哲
編集委員 相場慎一郎 大澤 剛士
岡野 隆宏 鏡味麻衣子
笠原 玉青 草刈 秀紀
古賀 庸憲 小林 剛
今藤 夏子 島野 光司
白川 勝信 高田 宜武
土田 浩治 東樹 宏和
戸丸 信弘 中川弥智子
箱山 洋 肘井 直樹
嶺田 拓也 三宅 崇
村岡 裕由 村上 貴弘
山浦 悠一 和穎 朗太

保全生態学研究編集委員会 (2015.1 ~ 2017.12)

編集委員長 長谷川雅美

編集幹事	角野 康郎	西廣 淳	中丸麻由子	小泉 逸郎
編集委員	井口恵 一朗	石井 実	立木 佑弥	三木 健
	石濱 史子	井上 幹生	北島 薫	森長 真一
	植田 陸之	梅原 徹	塩尻 かおり	彦坂 幸毅
	加藤 真	角谷 拓	黒川 紘子	土居 秀幸
	河口 洋一	倉本 宣	山道 真人	
	小池 文人	高田まゆら		
	高槻 成紀	中越 信和		
	早矢仕 有子	藤井 伸二		
	増田 理子	三橋 弘宗		
	山本 智子	湯本 貴和		
	横溝 裕行	横山 真弓		
	細 将貴	奥山 雄大		

自然保護専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)
 委員長 吉田 正人：関東・自然公園・エコツアーリズム
 副委員長 和田 直也：中部
 幹事 須賀 丈：中部
 地区選出委員

露崎 史朗：北海道
 紺野 康夫：北海道
 星崎 和彦：東北
 黒沢 高秀：東北
 川上 和人：関東
 野間 直彦：近畿
 中井 克樹：近畿
 井上 雅仁：中国・四国
 大田 直友：中四・四国
 逸見 泰久：九州
 伊澤 雅子：九州
 内貴 章世：九州
 増沢 武弘：高山・亜高山
 竹門 康弘：陸水
 清水 善和：島嶼
 久保田康裕：熱帯・亜熱帯
 横畑 泰志：寄生生物
 阿部 晴恵：遺伝子
 常田 邦彦：鳥獣管理
 竹中 千里：大気汚染
 矢原 徹一：海外渉外
 村上 興正：環境行政
 安溪 遊地：エネルギー問題
 角野 康郎：湿地
 加藤 真：海洋
 水谷 瑞希：MAB
 神山 智美：環境法

将来計画専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)
 委員長 辻 和希
 副委員長 佐竹 暁子
 巖佐 庸 粕谷 英一
 酒井 章子 奥田 昇
 五箇 公一 田中 健太

生態学教育専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)
 委員長 西脇 亜也
 副委員長 畑田 彩
 非教育学部系枠：
 嶋田 正和 中田 兼介
 教育学部系枠：
 平山 大輔 丑丸 敦史
 三宅 崇
 高校教員枠 広瀬 祐司 中井 咲織
 宮田 理恵
 博物館枠 亀田佳代子 小林 誠

大規模長期生態学専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)
 委員長 日浦 勉
 伊東 明 大手 信人
 黒川 紘子 三枝 信子
 仲岡 雅裕 中村 誠宏
 正木 隆 石原 正恵
 中野 伸一

生態系管理専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)
 委員長 鎌田 磨人：里山・協働
 副委員長 松田 裕之：野生生物管理
 幹事 橋本 佳延：里山林・草原・協働
 幹事 西田 貴明：協働・制度設計
 西廣 淳：河川・湖沼・防災
 角野 康郎：湖沼・河川・湿地
 古賀 庸憲：海洋
 佐藤 利幸：高山
 塩坂比奈子：普及
 白川 勝信：湿地・草原・協働・制度
 高村 典子：陸水
 竹門 康弘：河川
 津田 智：草原・湿地
 富田 涼都：環境社会学
 中越 信和：景観生態
 中村 太士：河川
 日鷹 一雅：水田・農業生態系管理
 平吹 喜彦：震災復興
 逸見 泰久：渚・海洋
 正木 隆：森林・林業
 村上 興正：自然保護
 谷内 茂雄：流域管理モデル
 矢原 徹一：保全生物学
 山田 俊弘：森林

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

鏡味麻衣子 日浦 勉
 吉田 丈人 岸田 治
 塩尻かおり 土居 秀幸

大会企画委員会

委員長 山本 智子
 副委員長 土居 秀幸
 運営部会 小池 伸介 幸田 良介
 竹中 明夫 田邊 晶史
 直江 将司 關 義和
 立木 佑弥 中川弥智子
 (Web) 長谷川成明 末次 健司
 (広報) 陶山 佳久 岸本 (莫) 文紅
 シンポジウム部会
 加茂 将史 吉田 勝彦
 及川 真平 東樹 宏和
 佐藤 拓哉 熊野 了州
 若松 伸彦 清野 達之
 小柳 知代 上田 実希
 伊藤江利子 西嶋 翔太
 境 優 川西 亮太

発表編成部会

小泉 逸郎 下野 綾子
 吉岡 明良 西廣 淳
 土松 隆志 福井 大
 北西 滋

ポスター部会

池田 紘士 近藤美由紀
 永松 大 小口 理一
 加藤 知道 岡本 朋子
 野田 響 北條 賢
 赤坂 宗光 伊藤 健彦
 末次 健司 竹内 勇一
 内海 俊介

高校生ポスター部会

栗和田 隆 水澤 玲子
 深澤 遊 小口 理一
 山村 靖夫 内海 俊介
 宮田 理恵 三宅 崇
 岡本 朋子 栗山 武夫
 馬場 友希 高原 輝彦
 細 将貴 高橋 佑磨
 塩尻かおり

英語口頭発表部会

仲澤 剛史 黒川 紘子
 杉浦 真治 韓 慶民
 前野ウルド浩太郎 彦坂 幸毅
 潮 雅之 飯田 佳子
 石川 麻乃 石川 尚人

野外安全管理委員会

委員長 鈴木準一郎 2016.4 ~ 2018.3
 粕谷 英一 2016.4 ~ 2018.3
 石原 道博 2016.4 ~ 2018.3
 北村 俊平 2016.4 ~ 2018.3
 大館 智志 2017.4 ~ 2019.3
 飯島 明子 2017.4 ~ 2019.3
 奥田 昇 2017.4 ~ 2019.3

キャリア支援専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)

委員長 中坪 孝之
 副委員長 宮下 直
 上野 裕介 大西 勇
 黒瀬奈緒子 鈴木 智之
 鈴木 牧 曾我 昌史
 高村 典子 西田 貴明
 沼田 真也 別宮由紀子
 水野 晃子
 オブザーバー 岩井 紀子 可知 直毅
 木村 恵 佐々木晶子
 塩尻かおり 富田 基史
 半場 祐子 深谷 肇一
 三宅 恵子

電子情報委員会 (2016.4 ~ 2018.3)

委員長 竹中 明夫 大澤 剛士
 久保 拓弥 眞板 英一
 富田 基史



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

平成29(2017)年度センター活動予定

生態学研究センターにおける平成29年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

1. プロジェクト

大型共同研究としては、連携機関である総合地球環境学研究所(地球研)との共同企画プロジェクト「生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会-生態システムの健全性」(研究代表者: 奥田 昇)、および「自然条件下における生物同調現象」(研究代表者: 工藤 洋)(科学研究費補助金、基盤研究S)が進められている。これらのほか、JST 戦略的創造研究推進事業(CREST)(2件)、環境省環境研究総合推進費(1件)、さきがけ(1件)、科学研究費補助金による研究(40件)、民間財団寄付金による研究(5件)なども進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員(Affiliated Scientist)を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業(次頁の表を参照)

平成29年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の交流や若手研究者育成の観点から、6件の共同研究、7件の研究集会・ワークショップを採択した。開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度(第三金曜日)セン

ター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室(会場への道順は、センターのホームページ参照)の予定である。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に3回(7月、11月、3月)発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

京大附置研究所・センターの一般公開イベント「京大ウィークス」に時期を合わせ、一般公開「授業で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置(元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置(熱分解型元素分析計)、GC/C(ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus と、PreCon-GasBench II(自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス)、元素分析計、GC/Cを装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計2

台が稼働している。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：陸域モジュール、水域モジュールが利用可能である。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CERの森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：木庭

観測船関係：合田

シンバイオトロン関係：高林

実験圃場林園関係：酒井

8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

平成 29 年度 共同研究・ワークショップ・研究集会 採択申請一覧

申請者	所 属	申込内容	研 究 課 題
近藤竜二	福井県立大学 海洋生物資源学部	共同研究 a	湖沼底泥中の嫌気性原生生物の分離・培養と生理
槻木玲美	松山大学 法学部	共同研究 a	古陸水学的手法と遺伝子解析技術を駆使した過去 100 年間にわたる微生物間の相互作用の解析
仁科一哉	国立環境研究所 地球環境研究センター	共同研究 a	窒素同位体比の土壌鉛直プロファイルの制御要因解析とそのモデル化
嶋田正和	東京大学大学院 総合文化研究科	共同研究 a	サイカチマメゾウムシの配偶行動を解明するマイクロサテライトマーカーの開発
清水 (稲継) 理恵	Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich	共同研究 a	異質倍数体植物の環境適応のフィールドでの表現型解析
土岐和多瑠	名古屋大学大学院 生命農学研究科	共同研究 a	コメツキモドキ共生酵母が作る抗菌物質の特定
三木 健	国立台湾大学 海洋研究所	ワークショップ	微生物群集機能を評価するためのエコプレート統計解析講座
谷内茂雄	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	理論生態学の展望：生物多様性から生態系の持続的な管理まで From biodiversity to sustainability: Key challenges of theoretical ecology
中野伸一	国立台湾大学 海洋研究所	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖
木庭啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2017
木庭啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	脱窒菌同位体比測定法ワークショップ 2017
吉田弥生	京都大学 野生動物研究センター	研究集会	2017 年度 勇魚会シンポジウム「海棲哺乳類の解剖研究死体は語る」
花田 智	首都大学東京大学院 理工学研究科	研究集会	シアノバクテリアの生態学的多様性と系統分類

センター関係者の動き

- 1) 大串隆之教授が、3月31日付で退職しました。
- 2) 研究員の渡部 宏氏が、3月31日付で退職しました。
- 3) 京都大学人間・環境学研究科 助教の東樹宏和氏が、4月1日付けで准教授に就任しました。
- 4) カリフォルニア大学バークレー校 研究員の宇野裕美氏が、4月1日付けで特定准教授に就任しました。
- 5) 平成 29 年度の研究員は、鈴木俊貴氏、門脇浩明氏、辻 かおる氏の 3 名です。
- 6) Luisa Isaurat Falcon Alvarez 氏 — (メキシコ国立自治大学・教授) が、招へい研究員として4月24日～7月31日まで滞在予定です。
- 7) Tapan Kumar Kar 氏 — (シブプール インド国立科学技術研究所・教授) が、招へい研究員として6月1日～8月31日まで滞在予定です。
- 8) Richard Karban 氏 — (カリフォルニア大学デービス校・教授) が、招へい研究員として8月23日～11月22日まで滞在予定です。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	年会費*	大会発表	総会・委員 (選挙・被選挙権)
正会員(一般)	9500円	○	○
正会員(学生)	6500円	○	○
賛助会員	22000円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- | | |
|----------------------|-----------------|
| ・日本生態学会誌 | 正会員のみ有 |
| ・保全生態学研究 | 正会員・保全誌定期購読者のみ有 |
| ・Ecological Research | 投稿権利は会員に限定されません |

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| ・日本生態学会誌 | 600円 |
| ・Ecological Research | 900円(2017年)、8000円(2018年) |
| ・保全生態学研究 | 2000円** |

**非会員の方の保全誌定期購読料は年額5000円です。なお、保全誌は発行後2年間、オンラインアクセスができません。

地区会費

正会員は、住所(所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう)により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区(200円):北海道
- ・東北地区(600円):青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区(400円*):茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区(0円):長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区(400円):滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区(400円):鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区(700円):福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先: 一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口
〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター
E-mail: esj-post@bunken.co.jp
Tel: 03-5937-2721 Fax: 03-3368-2822